

東京芸術見本市2010  
開催報告書

Speed Networking

Showing



Tokyo Performing Arts Market

The 14th  
東京芸術  
見本市2010  
Tokyo Performing Arts Market 2010

## ■ 目 次 ■

00.	総括	P.3
01.	開催概要	P.4
02.	参加者内訳	P.5
03.	海外参加者一覧	P.7
04.	ブース・プレゼンテーション	P.13
05.	ヴィジュアル・プレゼンテーション	P.15
06.	TPAM ショーケース	P.16
07.	セミナー	P.18
08.	スタジオ・ショーイング／ワークショップ	P.28
09.	スピード・ネットワーキング	P.29
10.	レセプション	P.30
11.	パブリシティの記録	P.31
12.	主な掲載記事	P.33



## 00. 総括

東京芸術見本市 2010 は、毎年併設開催されているインターナショナル・ショーケース 2010 と協力提携し、3月1日～4日の4日間にわたり、会場を昨年、一昨年のお比寿から池袋の東京芸術劇場に移して開催された [TPAM ショーケース実施期間は2月27日～3月5日]。お集まりいただいた舞台芸術関係者の数も昨年より約270名と大幅に増加し、初参加の若手アーティストが際立つ一方で、常連の団体からも今までになく充実した開催であったとの言葉をいただくことができた。

今回の大きな成果として、東京芸術劇場との共催により劇場設備の利用が可能になり、国内外で需要の高い中劇場規模の公演を実現できたことが挙げられる。また、ブリティッシュ・カウンシルの協力を得て、劇場以外の場所で行なう観客参加型パフォーマンスや体験型のソーシャル・ゲームなど、既存の舞台芸術の枠を超えたインタラクティブな作品を実施し、さらにセミナーで作品の生まれた社会的、経済的、芸術的背景やジャンルを超えた日本のアーティストの試みとの比較検証を行うことで、舞台芸術の多様性を紹介することができた。

これらの作品の多くは、複数のアーティストとの共同制作の作品であり、今回の実施を契機に、将来、日本のアーティストとの共同作業による作品制作の可能性もあり得る。単なる作品提示に留まらず、ある国の作品を招聘するという形式から、さまざまな国や地域のアーティストによる共同制作という形態に移行しつつある舞台芸術の現状を紹介することもできたと思う。

また、現在、国内の制作者にとって最注目トピックのひとつである、劇場法、国際共同制作をセミナーのテーマとして取り上げたほか、見本市の向かうべき方向について、舞台芸術の第一線で活動する海外プレゼンターの意見を聞きつつオープンに議論できたことは、今一度、当催事の担うべき役割について問い直し今後活かす上で、当催事をつくる我々と活用いただく参加者双方にとって非常に有意義なセッションであった。

テクニカルな面では、昨年同様、必要なプログラムにはすべて同時通訳や英語字幕を用意することを徹底した。1995年の初回から数えて14回目の開催となった本催事であるが、日本語を解さない参加者の作品理解を助ける努力を一つ一つ積み重ねてきた結果、バイリンガルの国際的なショーケースとして諸外国の主要プレゼンターにも急速に定着しつつあることは、今年の海外参加者が昨年より80名以上増加した、その数字にも表われていると言えよう。

グローバル化が加速する中、舞台芸術の世界もまた、舞台芸術の表現を通して、異なる文化について、知り、理解した上で成立可能な真の相互交流への欲求が高まっている。そうした期待を真摯に受けとめ、現在までに築いてきた各種団体との協力関係を強化しつつ、本催事をより一層、舞台芸術制作者にとって必要とされる場とするよう尽力したいと思う。

末筆になりましたが、参加者の皆様、各関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

東京芸術見本市事務局

## 01. 開催概要

事業名：東京芸術見本市 2010

会期：2010年3月1日（月）～4日（木）

※TPAMショーケース：2月28日〔土〕～3月8日〔日〕

会場：東京芸術劇場 他

主催：東京芸術見本市 2010 実行委員会

（構成団体：国際交流基金／財団法人地域創造／国際舞台芸術交流センター）

共催：東京芸術劇場（財団法人東京都歴史文化財団）／ブリティッシュ・カウンシル

特別協賛：EU・ジャパンフェスト日本委員会

助成：財団法人日韓文化交流基金／スペイン大使館

協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー／テアトルプラトール／

ロングランプランニング株式会社／ケベック州政府在日事務所／

財団法人大阪 21 世紀協会

後援：外務省／総務省／経済産業省／文化庁／東京都／社団法人全国公立文化施設協会

併設事業：財団法人地域創造主催セミナー

舞台芸術制作者ネットワーク会議

（助成：財団法人セゾン文化財団／主催：国際舞台芸術交流センター）

協力事業：国際シンポジウム

（主催：文化庁／神奈川県文化芸術振興プラン推進事業実行委員会／

神奈川アーツ 21 実行委員会／財団法人神奈川芸術文化財団）

参加料：	ブース・プレゼンテーション（通常料金）	60,000 円
	ブース・プレゼンテーション（早期割引）	55,000 円
	ヴィジュアル・プレゼンテーション	35,000 円
	TPAM ショーケース	30,000 円
	* TPAM ショーケースとのセット料金	
	+ブース・プレゼンテーション（通常料金）	70,000 円
	+ブース・プレゼンテーション（早期割引）	65,000 円
	+ヴィジュアル・プレゼンテーション	45,000 円
	4日間通しビジター・パス（通常料金）	10,000 円
	4日間通しビジター・パス（早期割引）	8,000 円
	1日ビジター・パス	4,000 円



## 02. 参加者内訳

### 1. 参加者総数

	実数	延数
<b>参加者合計</b>	<b>1,245 名</b>	<b>3,309 人</b>
国内参加者合計	1,043 名	2,555 人
海外参加者合計 (33 カ国)	202 名	754 人

### 2. 参加形態別内訳

#### ■ ビジター等参加者数合計

	実数	延数
<b>4日間参加者 合計</b>	<b>377 名</b>	<b>1,508 人</b>
国内外内訳		
国内	272 名	1,088 人
海外	105 名	420 人
<b>1日参加者 合計</b>	<b>281 名</b>	<b>281 人</b>
国内外内訳		
国内	263 名	263 人
海外	18 名	18 人
各日内訳		
3月1日(月)	33 名	
3月2日(火)	94 名	
3月3日(水)	94 名	
3月4日(木)	60 名	
<b>整理券 入場者合計 (国内のみ)</b>	<b>276 名</b>	<b>276 人</b>
各日内訳		
3月1日(月)	159 名	159 人
3月3日(水)	117 名	117 人

#### ■ 出展等参加者合計

	実数	延数	団体数
<b>出展等参加者合計</b>	<b>311 名</b>	<b>1,244 人</b>	<b>98 団体</b>
<b>ブース出展</b>	<b>239 名</b>	<b>956 人</b>	<b>50 団体</b>
国内外内訳			
国内	170 名	680 人	39 団体
海外	69 名	276 人	11 団体
<b>ヴァジュアル・プレゼンテーション</b>	<b>38 名</b>	<b>152 人</b>	<b>20 団体</b>
国内外内訳			
国内	34 名	136 人	15 団体
海外	4 名	16 人	5 団体
<b>TPAM ショーケース</b>	<b>34 名</b>	<b>136 人</b>	<b>28 団体</b>
国内外内訳			
国内	28 名	112 人	26 団体
海外	6 名	24 人	2 団体

※ 「出展等参加者合計」の参加団体は複数プログラムへ参加した団体の重複も含む（人数は重複なし）。

### 3. 各企画の参加者数（入口にてカウント）

■ 東京芸術見本市 2010		入場者数
3月1日	セミナー：平田オリザ VS 岡田利規 連続対談 vol.1	121名
	パネル・ディスカッション：芸術見本市のこれから	89名
	オープニング・レセプション	331名
3月2日	セミナー：平田オリザ VS 岡田利規 連続対談 vol.2	92名
	ヴィジュアル・プレゼンテーション（ダンス）	89名
3月3日	セミナー：財団法人地域創造セミナー 広がるアウトリーチの可能性	114名
	ブリティッシュ・カOUNシル ランチ・ミーティング	162名
	ヴィジュアル・プレゼンテーション（演劇／フェスティバル／劇場・ホール）	76名
	セミナー：再考・都市と芸術－新たな関係を求めて	71名
3月4日	セミナー：都市に浸透する「劇場」空間－イギリスの舞台芸術から	83名
	クロージング・パーティ	183名
	合計	1,411名
	TPAM ショーケース	107公演
	スタジオ・ショーイング／ワークショップ	19プログラム
	スピード・ネットワーキング（2日間）	86セッション

### 4. 併設事業参加者数（入口にてカウント）

■ インターナショナル・ショーケース 2010		
3月1日	音楽ショーケース：清水靖晃＋渋谷慶一郎	248名
3月2日	海外ショーケース：コニー	40名
	海外ショーケース：エイドリアン・ハウエルズ（1対1のパフォーマンス）	3名
	海外ショーケース：ゴブ・スクウッド	40名
	ダンス・ショーケース：Now, This is our "DANCE"	285名
3月3日	海外ショーケース：エイドリアン・ハウエルズ（1対1のパフォーマンス）	6名
	海外ダンス・ショーケース：カナダ・フィンランド・インドネシア	199名
3月4日	海外ショーケース：コニー	117名
	海外ショーケース：ゴブ・スクウッド	50名
	海外ショーケース：エイドリアン・ハウエルズ（1対1のパフォーマンス）	3名
	海外ショーケース：メラニー・ウィルソン／ティム・クローチ	7名
	演劇ショーケース：現代演劇の新鋭たち	118名
3月2～4日	海外ショーケース：ビリー・カウイー（随時入場可能）	140名
	合計	1,406名
■ 舞台芸術制作者ネットワーク会議		
3月2日	国内の制作者と海外のプレゼンターによるクローズドミーティング	20名

### 03. 海外参加者一覧

海外参加者総数： 33 の国と地域から 計 202 名

◆ビジター参加者 計 115 名

**【Australia／オーストラリア】** 10 名

Grainne BRUNSDON (Assistant Director, British Council)  
Bec DEAN (Associate Director, Performance Space)  
Lee-anne DONNOLLEY (Executive Producer, Arts Projects Australia)  
Andrew DONOVAN (Director, Australia Council for the Arts)  
Bill HARRIS (Head of Programming, SYDNEY FESTIVAL)  
Lisa HAVILAH (Director, Campbelltown Arts Centre)  
Anneke JASPERS (Project Coordinator, British Council)  
Steven RICHARDSON (Artistic Director, Arts House)  
Andrew ROSS (Director / Chief Executive Officer, Brisbane Powerhouse)  
Jacinta THOMPSON (Festival Director, Adelaide Festival Centre)

**【Austria／オーストリア】** 2 名

Stefanie CARP (Director For Performing Arts, Wiener Festwochen Ges.m.b.H.)  
Kira KIRSCH (Programmer, steirischer herbst festival)

**【Belgium／ベルギー】** 4 名

Mary Ann DeVLIEG (Secretary General, IETM)  
Pierre DROULERS (Co-director, Charleroi-Danses)  
Milica ILIC (Head Of Communication And Administration, IETM)  
Caroline VERMEULEN (Production-diffusion, Charleroi-Danses)

**【Canada／カナダ】** 2 名

Tina RASMUSSEN (Director, Performing Arts, Harbourfront Centre)  
Alvin TOLENTINO (Artistic Director, Co.ERASGA)

**【P.R.China／中華人民共和国】** 4 名

Wai Yee Winnie FU (Project Director, Microwave Company Ltd)  
Connie LAM (Executive Director, Hong Kong Arts Centre)  
Catherine LAU Kam-ling (Administrator, Hong Kong Fringe Club)  
Yuen Fun TAM (Manager [multi-arts], Leisure & Cultural Services Department)

**【Estonia／エストニア】** 1 名

Priit RAUD (Artistic Director, Kanuti Gildi SAAL / Baltoscandal festival)

**【Fiji／フィジー】** 1 名

Allan ALO (Choreographer/Artistic Director, Oceania Dance Theater)

**【Finland／フィンランド】** 1 名

Anna TALASNIEMI (Scientific Secretary, Kone Foundation)

**【France／フランス】** 2 名

Camille LOUIS (Editor in chief of 104 revue, CENTQUATRE 104) 他 1 名

**【Germany／ドイツ】** 4 名

Stefan HILTERHAUS (Director, PACT Zollverein)  
Frie LEYSEN (Artistic Director, Theater der Welt)  
Andras SIEBOLD (Program Curator, Kampnagel International Centre for Finer Arts)  
Werner LEONARD (Weleon Entertainment GMBH)

**【Hungary／ハンガリー】** 1 名

György SZABÓ (Director, Trafó- - House of Contemporary Arts)

**【India／インド】** 1名

Pankhuri AGRAWAL (Senior Programme Executive, Attakkalari Centre for Movement Arts)

**【Indonesia／インドネシア】** 6名

Andi BOEDIMAN (Chief Innovation Officer, Plasa.com)

Anom HAMENGKU BUDI (Department Head, PT. Pembangunan Jaya Ancol)

Saut HUTAURUK (Deputy Governor Supervisor, Jakarta Capital City Government)

Farida KUSUMA ROCHANI (Event Manager, PT Pembangunan Jaya Ancol)

Aurora TAMBUNAN (Deputy Governor For Culture & Tourism, Jakarta Capital City Government)

Eka YUDHA SARJANA (Managing Director, Solusigemilang Karyapratama, PT)

**【Israel／イスラエル】** 1名

Anatoli AKERMAN (Clown, Cirque du Soleil)

**【Korea／韓国】** 13名

CHOI Seok Kyu (Creative Producer, AsiaNow/Chuncheon International Mime Festival)

KIM Seo-ryoung (General Director/Executive Producer,  
ChangMu International Dance Festival / EO Creative)

LEE Kyungeun (Lighting Designer, Intergate)

PARK Byung Hoon (Chief Manager, Programming Dept., Geoje Arts Center)

PARK Yoonjoe (Projects Manager, British Council)

KIM Seong Hee (Director, Festival Bo:m)

SHIN Jaehee (Master Electrician, INTERGATE)

SUNG Claire (Senior Manager, Seoul Performing Arts Festival)

KIM Sunjung (Director, SAMUSO)

HWANG Eun Ju

HWANG Yun Dong

LEE Hyun-Min (Japan Planning Manager, Executive Committee of  
Keochang International Festival of Theatre)

NAM Ji Sun (Performance Planner, INTER GATE)

**【Malaysia／マレーシア】** 1名

Joanne LOW (Manager, Partnerships & Programmes, British Council)

**【Mongolia／モンゴル】** 3名

Baljinnyam AMARSANAA (Producer, ST studio)

Batzana ORGILMAA (Musician, ST studio)

Myanganbuu SANJAAJAV (Musician, ST studio)

**【New Zealand／ニュージーランド】** 5名

Anna ROSS (Freelance Producer, Freelance producer)

Jermaine FRASER (Freelance Digital Artist, NZ Dyson Alumnae)

Leary INGRID (Country Director, British Council)

Andre JEWELL (Director/producer, Gaia Films Ltd)

Bryan PATERSON (General Manager & Committee Member, Atamira Dance Company)

**【Poland／ポーランド】** 1名

Maciej NOWAK (Director, INSTYTUT TEATRALNY im. Zbigniewa Raszewskiego)

**【Romania／ルーマニア】** 1名

Constantin CHIRIAC (Director, Sibiu International Theatre Festival &  
"Radu Stanca" National Theatre)

**【Singapore／シンガポール】** 8名

Sherman KO (Director, Eraflage Music)

Dan PRICHARD (Director Of Programmes, British Council)

Paul RAE (Researcher/director, National University of Singapore/spell#7)

TANG Fu Kuen (Dramaturg And Producer, Independent)

Meera VIJAYENDRA (Vice-president & Director, IMG ARTISTS)  
Christopher WADE (Director Programmes East Asia, British Council)  
Mervyn QUEK (Asst. Manager, Prog. Marketing, ESPLANADE-THEATRES ON THE BAY)  
Sylvia LOW (Manager [Programming & Operations],  
National Arts Council Singapore/Singapore Arts Festival)

**【Slovenia/スロヴェニア】 1名**

Mojca JUG (Programmer of the venue and the Festival Mladi Levi, Bunker, Ljubljana)

**【Spain/スペイン】 1名**

Marc OLIVE (Programmer, Teatre Mercat de les Flors)

**【Switzerland/スイス】 2名**

Sandro LUNIN (Artistic Director, Zürcher Theater Spektakel)

Yoko MIYATA (Project Coordinator, JUNINTOIRO)

**【Thailand/タイ】 12名**

David ELLIOTT (Head Arts, East Asia, British Council)

Mallika IAMLA-OR (Arts Manager, British Council)

Pantavit LAWAROUNGCHOK (Director, Apostrophy's The Synthesis Server Co., Ltd.)

Sirichai LEANGVISUTSIRI (Project Manager, Apostrophy's The Synthesis Server Co., Ltd.)

Kosin POONKASEM (Art Director, Apostrophy's The Synthesis Server Co., Ltd.)

Waranyu SAENGSAWANG (Graphic Designer, Apostrophy's The Synthesis Server Co., Ltd.)

Pratarn TEERATADA (Director, corporation 4d)

Jariyaporn VAIDHAYAKUL (Assistant To Managing Director, Sixnature Incorporation Co., Ltd.)

Rachata WAI-ARSA (Creative, Sixnature Incorporation Co., Ltd.)

Chomwan WEERAWORAWIT (Director Of Intellectual Property And Special Projects,  
Mass Communication Organisation of Thailand)

Thosathep WONGNONGTEOY (Managing Director, Sixnature Incorporation Co., Ltd.)

Kasama YAMTREE (Architect/Project-coordinator, Apostrophy's The Synthesis Server Co., Ltd.)

**【The Netherlands/オランダ】 2名**

Ruud de GRAAF (CEO/Producer, Impresariaat Ruud de Graaf)

Hans de VISSER (Producer/Agent, Ruud de Graaf Special Productions)

**【Turkey/トルコ】 1名**

Umit OZDEMIR (Deputy Director, Theatre & Performing Arts Dept.,  
Istanbul 2010 European Capital of Culture Agency)

**【UK/英国】 7名**

Matt ADAMS (Artistic Director, Blast Theory)

Mark BALL (Artistic Director and Chief Executive, Lift [London International Festival of Theatre])

Gomez CATHY (Drama & Dance Advisor, British Council)

John Michael HOLDEN (Associate, Demos)

Jude KELLY (Artistic Director, Southbank Centre)

Glenn MAX (Producer, Southbank Centre)

Chris WAINWRIGHT (Artist/Curator/Dean of the School of Art at Central Saint Martins,  
University of the Arts London)

**【USA/米国】 11名**

Peggy KAPLAN (Photographer, Ronald Feldman Fine Arts, Inc.)

Robert KAPLAN (Photographer, Ronald Feldman Fine Arts, Inc.)

Bernard SCHMIDT (Director/owner, Bernard Schmidt Productions, Inc.)

SHIOYA Yoko (Artistic Director, Japan Society)

YOSHIDA Kyoko (Executive Director, Japan Cultural Trade Network)

Atam FREY (President, Mephisto Entertainment, LLC)

Margaret MIHORI (Assistant Executive Director, JUSFC [Japan-US Friendship Commission])

Pamera FIELDS (Assistant Executive Director, JUSFC [Japan-US Friendship Commission])

Charles HELM (Director of Performing Arts, Wexner Center for the Arts)  
Angela MATTOX (Performing Arts Curator, Yerba Buena Center for the Arts [YBCA])  
Martin WOLLESEN (Artistic Director, ArtPower! at UC San Diego)

**【Vietnam/ヴェトナム】 6名**

HA Ha Thien (Arts And Culture Officer, British Council Vietnam)  
HUYNH Dat Tien (Deputy Director, Hue Festival Centre)  
LE Duong Thanh (General Director, Truong Son Company)  
NGUYEN Tinh Van (General Director, Ministry of Culture, Sports and Tourism)  
TRAN Luong (Visual Artist, Freelance Curator)  
TRUONG Nhuan (Deputy Director, Youth Theatre)

**◆ブース・プレゼンテーション参加者 計11団体・44名**

**【Canada/カナダ】 4名**

Alain PARE (Chief Executive Officer, CINARS)  
Elisabeth COMTOIS (Agent, Agence Station bleue)  
Serge PARE (President, Productions Serge Paré)  
Laurence WEGSCHEIDER (Communication et Développement, Jose Navas/Compagnie Flak)

**【Czech Republic/チェコ】 2名** \*Prague Quadrennialはヴィジュアル・プレゼンテーションにも参加  
Petr PROKOP (Head Manager of Prague Quadrennial, Arts & Theatre Institute)  
Renata PROKOPOVA (Assistant, Arts & Theatre Institute/Prague Quadrennial 2011)

**【Denmark/デンマーク】 2名**

Jens BJERREGAARD (Artistic Director, Mancopy Dansekompagni)  
Swee Boon KUIK (Artistic Director, T.H.E Dance Company)

**【Finland/フィンランド】 21名** \*Dance Info Finlandはヴィジュアル・プレゼンテーションにも参加

Lotta VAULO (Information Officer, Finnish Circus Information Centre)  
Maija ERANEN (Producer, Circo Aereo Company)  
Anne JAMSA (Producer, Association WHS)  
Riitta SEPPALA (Director, Finnish Theatre Information Centre)  
Maaria RANTANEN (Director, Theatre Centre Finland)  
Henriikka SEPPALA (Assistant to the Director, Finnish Theatre Information Centre)  
Petri POYHONEN (Producer, Music Theatre Kapsäkki)  
Aija SALOVAARA (Producer, RedNoseClub)  
Kirsi MUSTALAHTI (Manager, Tirakkor-group)  
Eva NEKLYAEVA (Festival Director, Baltic Circle Festival)  
Jenny NORDLUND (Managing Director, Teatteri Metamorfoosi)  
Paula KARLSSON (Assistant Manager, International Affairs, Dance Info Finland)  
Pirjetta MULARI (Manager, International Affairs, Dance Info Finland)  
Outi JARVINEN (Zodiak)  
Janne IKAHEIMO (Manager, Nomadi Productions)  
Iikka Kullervo KONGAS (Managing Director, Dance Theater Rimpparemmi)  
Mika VAYRYNEN (Event Manager, Finnish National Gallery)  
Janina VILEN (Managing Director, Susanna Leinonen Company)  
Marinella JASKARI (Managing Director, K.Kvarnström &co./Helsinki Dance Company)  
Virva TALONEN (Choreographer)  
Jaakko KUJALA (Dance Info Finland)  
Tuija KOKKONEN (Artistic Director, Director, Maus & Orlovski - performance collective)  
Sini HAAPALINNA (Live Artist, Maus & Orlovski - performance collective)

**【Korea/韓国】 4名**

WOO Yeon (Director, Korea Arts Management Service)  
PARK Ji-sun (Manager, Korea Arts Management Service)  
LEE Hyeonock Mel (Project Executive, Korea Arts Management Service)  
YOO Byong-jin (Staff, Korea Arts Management Service)

**【Poland／ポーランド】** 6名

Roman KUSNIERZ (Development Director, SILESIAN DANCE THEATRE)  
Katarzyna FURMANIUK (Vice Development Director, SILESIAN DANCE THEATRE)  
Jacek LUMINSKI (Artistic Director, SILESIAN DANCE THEATRE)  
Marta Zofia KARSZ (Second Secretary, The Embassy of the Republic of Poland)  
Jaroslaw WACZYNSKI (Adviser, The Embassy of the Republic of Poland)  
Luczko MIROSLAW (Counsellor–Head of Cultural Department, The Embassy of the Republic of Poland)

**【Sweden／スウェーデン】** 3名 \*Loco Motionはヴィジュアル・プレゼンテーションにも参加

Asa EDGREN (General Manager, Loco Motion)  
Anneli STROMQVIST (Cullberg Ballet)  
Annica WIDMARK (Skanes Dansteater)

**【UK／英国】** 2名

Deborah DIGNAM (Drama & Dance Advisor, British Council)  
Cathy GOMEZ (Drama & Dance Advisor, British Council)

**◆ヴィジュアル・プレゼンテーション参加者** 計5団体・4名 \*ブースにも参加した者は割愛

**【Finland／フィンランド】** 2名

Tuija KOKKONEN (Artistic Director, Director, Maus & Orlovski - performance collective)  
Sini HAAPALINNA (Live Artist, Maus & Orlovski - performance collective)

**【UK／英国】** 2名

James YARKER (Artistic Director, Stans Café)  
Charlotte MARTIN (General Manager, Stans Café)

**◆TPAM ショーケース参加者** 計2団体・6名

**【UK／英国】** 6名

Greg McLAREN (Artist, Stoke Newington International Airport)  
Gary CAMPBELL (Artist, Stoke Newington International Airport)  
Zekan CEMAL (Artist, Stoke Newington International Airport)  
Nicholas RUTHERFORD (Artist, Stoke Newington International Airport)  
Gregor BEGG (Artist, Stoke Newington International Airport)  
Duncan SPEAKMAN (Artist, Subtle mob)

**◆インターナショナル・ショーケース 2010 参加者** 計9団体・33名

**【Canada／カナダ】** 13名

**カ・ピュブリック**

Susan Davis PAULSON (Dancer, Cas Public)  
Roxane DUCHESNE-ROY (Dancer, Cas Public)  
Merryn Ellen Ursula KRITZINGER (Dancer, Cas Public)  
Kyra Jean GREEN (Dancer, Cas Public)  
Pierre LECOURE (Dancer, Cas Public)  
Georges-Nicolas TREMBLAY (Dancer, Cas Public)  
Mickaël SPINNHIRNY (Dancer, Cas Public)  
Rocky LEDUC GAGNÉ (Dancer, Cas Public)  
Adam JOHNSON (Musician, Cas Public)  
Laurier RAJOTTE (Musician, Cas Public)  
Samuel THÉRIAULT-LANGELIER (Technician, Cas Public)  
Andréanne DESCHÉNES (Technician, Cas Public)  
Denis BERGERON (Agent, ART CIRCULATION [Cas Public])

**【Finland／フィンランド】 5名**

**カルトゥネン・コレクティブ**

Jyrki KARTTUNEN (Dancer/Artistic Director, KARTTUNEN KOLLEKTIV)

Pia REPO (International Affairs, KARTTUNEN KOLLEKTIV)

Satu IMMONEN (Producer/Technical, KARTTUNEN KOLLEKTIV)

William ILES (Technical, KARTTUNEN KOLLEKTIV)

Eero VESTERINEN (Dancer, KARTTUNEN KOLLEKTIV)

**【Indonesia／インドネシア】 8名**

**ナン・ジョンバン・ダンス・カンパニー**

Eri MEFRI (Choreographer/Chairman, Nan Jombang Dance Company)

Angga MEFRI (Co-manager, Nan Jombang Dance Company)

Rio Indra WAHYUDI (Dancer, Nan Jombang Dance Company)

Geby DELSA WAHYUNI (Dancer, Nan Jombang Dance Company)

Intanni EBY (Dancer, Nan Jombang Dance Company)

Maulidya OKTARINA (Dancer, Nan Jombang Dance Company)

Tria VITA HENDRA DJAJA (Lighting Designer, Nan Jombang Dance Company)

Yurnaldi (Manager, Nan Jombang Dance Company)

**【UK／英国】 7名**

**メラニー・ウィルソン** Melanie WILSON (Artist)

**ティム・クローチ** Tim CROUCH (Artist)

**エイドリアン・ハウエルズ** Adrian HOWELLS (Artist)

**ビリー・カウイー** Billy COWIE (Artist)

**コニー+ハイド・アンド・シーク**

Tassos STEVENS (Runner/Co-Director, Coney/Hide & Seek)

Andy FIELD (Director, Forest Fringe)

**ゴブ・スクワッド** Johanna FREIBURG (Artist, Gob Squad)

## 04. ブース・プレゼンテーション

3月2日(火) 13:00-16:00、3日(水) 13:00-17:00、4日(木) 12:30-15:30

東京芸術劇場 5階 展示ギャラリー

### ■出展団体■ 計50団体・50ブース

#### <ダンス> 計5団体・5ブース

Independent Artists Japan  
国際舞踏連絡協議会 (LIB)  
鈴木ユキオ (金魚)  
DAZZLE  
Dance Company BABY-Q

#### <演劇> 計6団体・6ブース

(有) アゴラ企画/青年団  
岡崎藝術座  
劇団グスタフ スウェーデン演劇「令嬢ジュリー」  
五反田団海外部門  
d'UOMO ex machina + COLLOL  
ももいろぞうさん

#### <音楽> 計3団体・3ブース

志多ら  
デリシャスウィーツ  
ヒダノ修一 with HIT's

#### <フェスティバル> 計3団体・3ブース

あいちトリエンナーレ 2010  
エイブルアート・オンステージ  
フェスティバル/トーキョー

#### <劇場・ホール> 計11団体・8ブース

青山劇場・青山円形劇場/スパイラルホール  
アクティオ & 北沢タウンホール & 成城ホール  
神奈川芸術劇場 (2011年1月開場)  
座・高円寺/NPO法人 劇場創造ネットワーク  
島根県芸術文化センター「グラントワ」いわみ芸術劇場  
世田谷パブリックシアター  
東京芸術劇場  
富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ

#### <制作会社・エージェント> 計6団体・6ブース

株式会社 アンクリエイティブ  
ステーション  
HI WOOD!  
ブリコグ  
ミホプロジェクト  
日本パフォーマンス/アート研究所

#### <舞台芸術関連団体> 計1団体・1ブース

カンフェティ



**<海外団体>** 計 12 団体・15 ブース

コリア・アーツ・マネジメント・サービス/ソウル舞台芸術見本市（韓国）

シナール — ケベック・オン・ステージ（カナダ）

シレジアン・ダンス・シアター（ポーランド）

フィンランド・サーカス情報センター（フィンランド）

フィンランド・ダンス情報センター（フィンランド）

フィンランド演劇情報センター（フィンランド）

ナン・ジョンバン・ダンス・カンパニー（インドネシア）

プラハ・カドリエンナーレ 2011（チェコ）

ブリティッシュ・カウンシル（英国）

ポーランド演劇（ポーランド）

マンコピー/T.H.E ダンス・カンパニー（デンマーク）

ロコ・モーション（スウェーデン）

**<主催団体>** 計 3 団体・3 ブース

国際交流基金

財団法人 地域創造

国際舞台芸術交流センター

■ 総括 ■

ブース・プレゼンテーションには 50 団体が出展、前回の出展団体数より微減しているが、会場自体も小さくなった上に、床面積に対し最大数のブース（間口 2,000mm×奥行 1,200mm×高さ 3,000mm）を設置したため、文字通り「満員」状態だった。若干窮屈にも見られたが、結果的にはその窮屈さが、むしろ活気を醸し出していたとさえ言える賑わいだった。

出展団体は、いわゆる常連組だけではなく、初めて出展する団体も多かった。そこで、出展者マニュアルには、前回開催時のブース写真を掲載するなど、ブース・プレゼンテーションの具体的なイメージをつかんでもらえるよう工夫をした。また、初めて出展する団体には、ブースを訪れる人に対してどのようなアプローチが効果的か、事前にコンタクトをするように努めた。各出展団体、特にアーティストを中心とする芸術団体は、それぞれの持ち味を活かしたテイストにブースを彩っていたと思う。

出展団体のブース位置については、基本的に出展者説明会の際、くじ引きで決定したが、そのロケーションを元に、ある程度同じ分野、あるいは似たテイストを持ったブースをまとめて配置するよう配慮した。例えば、ダンス・公共ホール・海外からの出展団体・フェスティバルなどというように、大まかな分類をロケーションに付け加え、参加団体同士の交流も創出するべく工夫した。

また、今回、ダンサーの JOU が中心となって、総勢 14 名のダンサーの共同出資によるブースが出展された（Independent Artists Japan）。インディペンデントで活動するアーティストの共同出展というスタイルは、今度のブース・プレゼンテーションの出展形態のひとつのモデルケースとして提案できると思う。出展料の面だけでなく、拘束時間、制作者の不在、コンテンツが足りないなどという理由で出展を躊躇するような場合も多く、そういったケースへのソリューションとなるだろう。

アンケートでは、例年よりもブースが若干小さかったことなどを指摘する声もあったが、出展者からの評判は概ね良く、搬入・搬出・出展時間などもバランス良く設定できたと思われる。東京芸術見本市の出展者は、必ずしも実演団体だけではない。ホールやフェスティバルのように、会場内に拠点/スペースを設けて自らのプログラムなどを紹介した方が、より効果的な団体もある。今後もブース・プレゼンテーションには一定のニーズがあると考えられるので、より効果的、かつ魅力的なブース・プレゼンテーションを考案していかなければならない。

## 05. ヴィジュアル・プレゼンテーション

### ■参加団体■ 計 20 団体

3月2日(火) 13:30~15:30 : ダンス

3月3日(水) 13:30~15:30 : 演劇/フェスティバル/劇場・ホール

東京芸術劇場 5階 中会議室

### <ダンス> 計 10 団体

ARICA

大橋可也 & ダンサーズ

DAZZLE

朱鷺色卵

高襟

86B210

Yuzo Ishiyama / A.P.I.

サト・エンドウ

Dance Info Finland (フィンランド)

ロコ・モーション (スウェーデン)



### <演劇・音楽・劇場/ホール>

計 6 団体

CAVA (さば)

シアターカンパニー Ort-d.d

スタNZ・カフェ (英国)

JIPAS 大日座 旗揚げ準備室

太陽の遊園地

マウス & オロフスキー (フィンランド)



### <演劇・音楽・劇場/ホール>

計 4 団体

あいちトリエンナーレ 2010

金沢 21 世紀美術館

高知県立美術館 (ヤミーダンス)

プラハ・カドリエンナーレ 2011 (チェコ)

### ■総括■

東京芸術見本市 2009 では、3 日間にわたり開催したヴィジュアル・プレゼンテーションだが、今回は 2 日間の開催とした。規模縮減の大きな理由は、会場の大きさ、画面のサイズなどが前回よりも小さくなるなど、技術的な変更点を考慮してのことだった。また、今回はセミナーやショーイングなど、例年に増してプログラム数が多いこともあって、2 日間に集中してプレゼンテーションを行う必要があった。ところが、登録を開始してみると、ヴィジュアル・プレゼンテーションを希望する出展者が多く、早期の段階で参加団体のラインナップが揃った。

プレゼンテーションの時間は例年通り 10 分弱。映像は主に DVD 素材を使用した。限られた時間のなかで、その後のコミュニケーションに繋がるプレゼンテーションができるよう、出展者には、事前に緻密なアドバイスをするように心がけた。例えば、東京芸術見本市 2009 の模様が YouTube にアップされているので (<http://www.youtube.com/PARCTV>)、初めての参加団体にはその映像を見てもらい、具体的なイメージを持ってもらえるように勧めた。また、短い時間でも多くの作品を紹介したい場合と、1 つか 2 つの作品をじっくりと紹介したい場合によって映像の編集を変えたり、ブースにも併せて出展している場合には映像にブース番号

を入れる等々、基本的ではあるが忘れがちなポイントも各団体要望、参加形態に沿ってリマインドすることを心がけた。

実際のプレゼンテーションは、どの団体・アーティストも非常に流暢にこなし、結果的にはプレゼンテーション会場が若干小さくなったことで、プレゼンテーションする側と見る側の間にある種の親密さが生まれ、やりやすかったように見える。プレゼンテーション後に声をかけたり、かけられたりといった光景も例年以上に多く見うけられた。

## 06. TPAM ショーケース

期間：2010年2月27日（土）～3月7日（日）

※6日・7日の公演は5日に公演を実施する団体に限り、予約代行を受付けた。

■参加団体■ 計28団体 ※二重カギ括弧内は公演タイトル

### <ダンス> 計12団体

アキコ ダンス プロジェクト『シアターインスタレーション』  
アंकリエイティブ『Tokyo Dance Market 2010』  
NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク (JCDN)『踊りに行くぜ!! vol.10 SPECIAL IN TOKYO』  
大橋可也&ダンサーズ『新作〔春の祭典〕ワークインプログレス』  
ズージー『Nuovo 舞踏』  
ダンスアトリエ オンパロス『青い花 — 色即是空』  
Dance Company BABY-Q『VACUUM ZONE』  
デワンダルダンスカンパニー『Riantoソロダンス ハルシネーション』  
ニブロール『矢内原美邦 新作ダンス公演「あーなったら、こうならない。」』  
高襟『東京★サイケデリック』  
パパ・タラフマラ『Nobody, NO BODY』  
86B210『ヨルノスイゾクカン』

### <演劇> 計15団体

江戸糸あやつり人形座『バツカイ』  
岡崎藝術座『リズム三兄妹』  
開幕ベナントレース『ROMEO and TOILET』  
柿喰う客『The Heavy User／ヘビー・ユーザー』  
北九州芸術劇場『ハコブネ』  
シアターカンパニー Ort-d.d『売り言葉』  
ストーク・ニューイントン・インターナショナル・エアポート（英国）『Live Art Speed Date / LASD Tokyo』  
太陽の遊園地『FELICE』  
ダンカン・スピークマン『あたかも最後の時であるかのように（サトルモブ）』  
チェルフィッチュ『わたしたちは無傷な別人であるのか？』  
d'UOMO ex machina + COLLOL『<in solitudine secum loqui...> sive de Libro Iob Veteris Testamenti』  
快快『Y時のはなし』  
富士山アネット『家族の証明.:』  
指輪ホテル『Candies』  
ミホプロジェクト『chori／童司 詩と狂言のパフォーマンス』

### <音楽> 計1団体

ARIGA10MUSIC『ZIPANG LIVE』

## ■総括■

東京芸術見本市実施期間前後である2010年2月27日～3月7日に、各団体によって運営される本公演やワークショップを「TPAMショーケース」として参加を募った。事務局では本プログラムに参加する団体に対して、1. 事務局作成による広報媒体での情報掲載（チラシ、ウェブサイト、当日プログラム、メール等）、2. 各公演へのチケット予約の代行・受付、3. EU・ジャパンフェスト日本委員会を介してのチケット購入プログラムを実施した。

### ・チケット予約の代行について

各団体に、チケットを提供する相手であるビジターのカテゴリー（海外プレゼンター、アーティスト、劇場関係者、プレスなど）と、そのビジターに対して、どのような価格（招待、割引など）でチケットを提供するかのリクエストを聞き、このリクエストに沿って、ビジターから各公演へのチケット予約を受け付けた。ビジターからの予約受付は、TPAM会期前の2月28日までは、ウェブサイトにチケット予約申込書をアップロードし、メールにて受け、3月1日からは会場内にデスクを設け、受け付けた。

### ・EU・ジャパンフェスト日本委員会を介してのチケット購入プログラムについて

本プログラム公演を、EU・ジャパンフェスト日本委員会への協賛企業にご紹介頂き、観劇希望者にはチケットを提供した。希望者分のチケットについては、各団体からEU・ジャパンフェスト日本委員会に購入頂いた。

従来の実施方法を踏襲しつつ、本年は本プログラム参加希望団体に見本市実施会場周辺の劇場をこれまで以上に多く紹介し、各劇場での上演を実現することが可能となった。事務局からの紹介に加え、前年度に引き続き、劇場にこだわらず、各作品に相応しい会場を見本市実施会場周辺で独自に探すというケースも増えている。

本年度は、初めてEU・ジャパンフェスト日本委員会によるチケット購入プログラムを実施した。募集期間が短かったにもかかわらず、12団体、60枚の観劇希望があり、舞台芸術関係者ではない観客へのアプローチを図った。募集期間がもう少し長ければ、さらに多くの観客の観劇につながったと考えられるので、今後の課題としたい。

また、今年は本プログラム単独での参加が、08・09年の過去3回のうちで最も多かった。参加団体のニーズに変化が生じてきていると考えられる。

見本市実施会場にて、複数の団体の実演を同一会場にてまとめて上演すること、参加団体数の増加、多様性のある実演、さらに予約しやすい仕組みづくりを実現し、上演環境が向上することを目指したい。

## 07. セミナー

※セミナーについては、下記、東京芸術見本市ホームページ上で全発言の採録集を公開している。

[http://www.tpam.or.jp/pdf/TPAM2010ConferenceRecord\\_j.pdf](http://www.tpam.or.jp/pdf/TPAM2010ConferenceRecord_j.pdf)

※財団法人地域創造主催セミナーのみ、下記財団ホームページ上の平成21年度調査研究報告書

『新 [アウトリーチのすすめ]』にセミナー内容及び使用資料等が一部反映されている。

<http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/new/index.php>

### 舞台芸術の「公共性」と「国際性」をめぐる

各国で芸術を取り巻く環境が過渡期を迎える中、舞台芸術が果たすべき役割について、第一線で活動する国内外の舞台人とともに考え、さらに14年にわたり開催してきた当催事が今後どのような役割を担うべきか、3つのセッションでその可能性を探った。

言語：日本語／英語同時通訳

#### ◆平田オリザ vs 岡田利規 連続対談 vol.1

私たちは何を成し遂げ、どこに向かっているのか— 真の公共劇場とは何か？

3月1日 [月] 10:00~12:00 / 東京芸術劇場 大会議室

#### ◆平田オリザ vs 岡田利規 連続対談 vol.2

私たちは何を成し遂げ、どこに向かっているのか— ジャパネスクから遠く離れて

3月2日 [火] 10:00~12:00 / 東京芸術劇場 中会議室

スピーカー：平田オリザ [青年団主宰・劇作家・演出家・大阪大学大学院教授]

岡田利規 [チェルフィッチュ主宰・演劇作家・小説家]

モデレーター：丸岡ひろみ [東京芸術見本市 事務局長]

当セッションでは、現在、ヨーロッパを中心に活動をしている平田オリザ氏と岡田利規氏を迎え、2日にわたって対談を行なった。

初日は「私たちは何を成し遂げ、どこに向かっているのか」と題し、前半は両氏のこれまでの活動紹介、後半は「劇場法」のあり方を軸に公共劇場・ホールについての議論が進められた。

平田氏は、日本語にはない強弱アクセントを使う劇言語に対する違和感から「現代口語演劇」を提唱し、リズムをどう捉えるかということを追及してきた。また岡田氏は「口語」が持つ冗長性を前面に出し、付随的に出てくる身振りを言葉とシンクロしていないものとして提示する作品づくりを経て、近作では、書き言葉で演劇を書くことにより、言葉がどのように「観客の中へ届き、植えつけられ、発芽するか」、パフォーマンスを受け取る観客の創造性の問題へと主要な関心移している。

2008・09年と、岡田氏は公共劇場で演出の仕事をしたが、自身の劇団でない俳優たちとの作業に、結果として力を出し切れないまま仕事を終えてしまったという実感を持っているという。言葉と身体をどう関連づけてパフォーマンスをするのか、といったクリエイションにとって本質的なことを、初めて仕事をする俳優たちに理解してもらうには時間がかかる。しかし、劇場法が制定され、劇場が主体となってプロダクションを行なっていくようになれば、自身の劇団で行なっているような仕事の仕方が、劇場に受け容れられない可能性もあるのではないかと懸念を示した。

岡田氏の発言を受け、平田氏は、アーティストがクリエイションを継続して集団で行なっていくような安定した環境をつくるために劇場法の整備が必要であり、ヨーロッパ各国の劇場法の良いところを取って、文化行政

の改革を行いたいと提案。具体的には、フランスの国立演劇センターのシステムに近いもので、劇場はカンパニーと契約を結んで作品を制作する。そうした劇場法ができると、初期の段階で30~50の劇場がクリエイションを行なうようになり、劇場法制定を推進する芸団協の見通しでは演劇と音楽を合わせて、最終的に200程度の劇場が創作活動を行なうようになるという。

また、日本では作品制作にかかったコストを初演で回収しようとするが、作品は繰り返し上演されて成熟し、強くなってゆくものであり、それによってパブリックなものとなる（岡田氏）。そのための再演のシステム、さらに制作した作品を海外で公演して資金を回収するシステムなど、劇場法に必要なさまざまな制度設計について意見が交わされた。

2日目の冒頭は、前日の劇場法についての発言の補足として、助成金、寄付税制、教育など、総合的に改変する必要があるという平田氏の発言から始められた。平田氏は、文化予算全体を増やすためには、公的な視点に耐え得る制度設計が必要であり、税金で作品をつくるにはきちんとした競争と淘汰がなければならないという。地域で演劇を続けたい劇団については、演劇教育を活動の場として想定しており、コミュニケーション教育と劇場法を両輪として、日本の演劇を「プロ化」することを提案した。

また、劇団への助成については、公演単体に助成するのではなく、人材育成という形で若手アーティストを援助すること、さらに海外公演への助成については、例えば3回目以降は招聘元が資金提供しているものに限るなど、選定基準を設けることが大事ではないかと述べた。

2日目は海外公演をテーマとし、主にフランス語圏の公共劇場との共同製作で作品をつくっている平田氏と、ヨーロッパ各国のフェスティバルとの共同製作を行なっている岡田氏が、各々の経験からヨーロッパでの共同製作の実際について紹介した。

ヨーロッパの比較的大規模な都市では、国際的かつ実験的な作品をプログラムするフェスティバルが増えてきており、同シーズンに開催されるフェスティバル間にネットワークがあること、またフランス各地の公共劇場間では初演時から他の劇場に作品を買い取ってもらうシステムがあり、買い支え合うことによってパリ資本に頼らずに地域の劇場が世界水準の作品がつけられることなど、具体的な劇場の予算規模を示して語られた。

また、アーティストとしてジャパネスク、エキゾチズムといったことをどう捉えるかについて、岡田氏は、「日本的なアイテム、日本でしかわからない話題だろうというものを、わからないという理由で除いていくことは絶対にしたくない」と述べた上で、「エキゾチズムを内面化してしまうことをどうやって防ぐか、それとどうやって戦うか」という自身の問題であると言い、自身が回っているフェスティバル・サーキットにおいては、「わからないこと自体がひとつの価値であるということ、ここは違和感を提供する場でもある」という認識があることが、作品が受け容れられた大きな理由でもあると解釈した。

一方の平田氏は、ジャパネスクを強調しなければヨーロッパのマーケットに参入できなかった時代があったが、現在は日本のアーティストがそのままマーケットに入っていける時代になってきたのではないかと、三島由紀夫作品と新劇を例に作品の「形式」と「内容」について分析。現代はグローバル化していてコンテンツは一緒だが、「世界中でハンバーガーを食べるようになって、その食べ方は民族ごとに違って」おり、そうした小さな差異を指し示すことが、21世紀の初頭に芸術家ができる最大の仕事だと思ふと述べた。

セッションの終わりに会場から、TPAMやフェスティバル／トーキョーが国内のカンパニーにとって海外への足がかりとなると考えるかという質問があった。これに対し岡田氏は、「今、日本の舞台芸術がおもしろいらしいという空気があり、フェスティバル・ディレクターは作品を見に来ている」と言い、真摯なディレクターやプログラマーほどマーケットを嫌う傾向はあるが、会期中にゲリラ的な、インディペンデントかつオルタナティブなイベントが発生すればそれを見に来るといふことがあるので、そういった活用をしてはどうかと提案した。

また、海外公演をの機会を阻むアーティスト自身のメンタリティの問題や、制作者が国際的なネットワークを持つことの重要性にも言及され、さらに海外招聘公演を行なっていければ舞台芸術で生計を立てられる可能性もあること、そのためには舞台芸術のマーケットが成立しているヨーロッパとの関係を持ち続け、より多くのカンパニーが海外ツアーを回るようになることが舞台芸術の状況を変えることへ繋がることと締めくくられた。

## ◆パネル・ディスカッション：芸術見本市のこれから

### 一 国際的な「主客」を超えるプラットフォームの設立にむけて

3月1日〔月〕13:30～15:30／東京芸術劇場 大会議室

言語：日本語／英語同時通訳

スピーカー：

マリー・アン・ドゥヴリーク [IETM 事務局長]

フリー・レイセン [Theater der Welt 2010 キュレーター]

タン・フクエン [ドラマトウルク／ディレクター]

塩谷陽子 [ジャパン・ソサエティ NY 芸術監督]

モデレーター：曾田修司 [跡見学園女子大学教授／国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター事務局長]

1995年、「見本市＝マーケット」という名称を掲げて設立された TPAM だが、その後、さまざまな状況の変化に応じて、2005年からは特に「同時代の舞台芸術」にフォーカスし、また、ブースを出展し、実演を見せるだけでなく、プレゼンター同士が出会い、情報交換するためのミーティングなどを強化してきた。その中で、「マーケット」という言葉からイメージされるものと催事自体の実態とに差が生じてきており、さらに現在、日本の文化政策が大きく変わろうとしているという状況がある。当セッションでは、芸術見本市が、この15年間で果たしてきた役割の再確認・再検討と、今後向うべき方向について、海外ゲストの意見を聞きつつ議論された。

○マリー・アン・ドゥヴリーク氏

TPAM は日本人と外国人とのミーティング・ポイントとしてだけでなく、ヨーロッパ人同士、さらに他のアジア諸国の人々とのネットワークのハブとして機能していると捉えている。

プロフェッショナルなネットワークの第一目的は「情報を共有すること」であり、ネットワークに参加することによって、他の仲間たちからより速くさまざまな情報を得、問題への対応を学ぶことが可能となる。第二の機能は「政治的な圧力をかけること」で、ロビー活動を通して資金であれ政府の政策であれ、諸々の条件を改善する努力をすることである。

IETM はメンバー間のヒエラルキーのないオープン・ネットワークで、唯一の参加条件はコンテンポラリー・パフォーマンス・アーツの仕事に携わり、国境を超えた活動を行っているということである。IETM の最大の目的は人相互のコミュニケーションの促進にあり、古いメンバーが新しいメンバーに教えるだけでなく、新規加入するメンバーが新しい考え方をもってくるといった不断のダイナミズムが重要である。現在、IETM メンバーの間でもレディメイドの作品を売買することから、より長期的なパートナーとの共同作業へと仕事の取り組み方が変化してきており、こういったネットワークの必要性は今後ますます高まると考えられる。

現在 IETM はヨーロッパの27の国と一緒に仕事をしているが、その文化政策は依然として国内的である。「国際的なパートナーシップが国民にとってどんな利益をもたらすのか」といった論調がよく聞かれるが、アーティストの世界に関する省察を提出することで、観客を新しい眼差しで世界を見ることへと触発できるという点において、大いに自国民の利益になる。我々は国際的なレベルで活動すべきであり、自身を触発し、考え方を開いてゆき、観客へ伝えてゆくべきだと考えている。

○フリー・レイセン氏

舞台芸術をめぐるさまざまなシステムがあり議論がなされるが、多くのシステムができ、それ自体が生命をもつようになると、最終的にアーティストのことが忘れられてしまうという状況が生まれる。例えば、ドイツのシステムは見事だが、あまりにも硬直していて、アーティストがシステムに自分を適合させなければならないという状態になっている。私たちはアーティストの仕事を支援するために存在するのであって、フェスティ

バルや劇場空間を埋めるために存在しているわけではない、という考え方が失われてしまっている。フェスティバルのキーになるのは、アーティストが関心の中心であるという考え方であり、それさえしっかりしていれば、あとは自然に生まれてくる。

コンテンポラリーな作品といった場合、映画、音楽、ダンス、演劇などさまざまな分野にまたがった作品ということも意味し、さらにラディカルな意味で国際的、つまり「非西洋的」であることも意味する。我々ヨーロッパ人が世界を知覚するやり方はいまだに非常に帝国主義的だと思うが、それに対抗し非西洋圏から若いアーティストを招聘すれば、非西洋圏の文化に対してまた違った概念をもつことができる。

アーティストを中心に置き、その必要や希望に応えるということは、自動的に新作の制作、共同製作、あるいはその支援をすることになるが、その場合観客に言えるのは「どういう作品になるかわからないが、このアーティストは重要だ」ということだけであり、リスクはもちろんあるが、それが、アーティストに関心の中心に置くということなのである。

私にとってフェスティバルとは、彼らが生きる社会に対して非常に個人的かつ批評的な視点をもったアーティストが集まるということであり、この世界の探求を彼らと共有することである。さまざまな考えのぶつかり合いが、観客にとって自分のものの見方を考え直す機会になることが重要であり、その意味で、フェスティバルは非常に不穏なものであるべきだ。また、活動を始めたばかりのアーティストが自分の作品を紹介し、発表させ、創作をし、異なった観客に対峙するためのプラットフォームを提供すること、未来へ投資することをしなければならない。

「マーケット」は売り買いをする場という意味で、プレゼンターがなすべきことに適用すべき言葉ではないし、アーティストは自分を「売る」べきではない。それでも TPAM に参加するのは、プラットフォームとしての機能や上演される作品のためである。短い期間で日本の最新の演劇作品をまとめて見ることができるという非常に強力な瞬間になり得、アジアの同業者と会って情報交換ができることも極めて重要で実りのあることだ。

アーツ・マーケットとしては、参加者が自由に交流し、話のできる場をつくれればこと足りる。むしろ予算の一部を、アーティスト個人が他の国の演劇を見に世界各地へ行くための、またプレゼンターが個人的にアーティストとつながりを持つための旅費として活用することを提案する。それこそがアーティストやプレゼンターの仕事の本質を成すと考える。

## ○タン・フクエン氏

私は非常に情報に貪欲で、ニューヨーク、ヨーロッパと放浪し、さまざまな情報を取り込んできた。そういった意味では非常に西洋中心型だったが、あるとき自分の裏庭、アジアについて何を知っているだろうかと自問し、アジアを自分の拠点にしようと決意した。

当時はアジアで情報を得ようとするのは非常に困難で、IETM のようなネットワークもなく、アジア人同士が十分に話をしていない状況だったので、独自にリサーチを行った。そうして集めた情報は共有すべきだと考え、情報、方法論、対話に関わる問題が芸術的フローを滞らせている局面を見極めることから始め、インディペンデントにイベントやプラットフォームを組織する方法を見つけ出し、未来の一端を担うと思われる新進のアーティストを浮上させることに取り組んできた。

私はアーティストの芸術的ビジョンとアーティスト本人に興味をもっている人間で、対話というものが重要な責務だと考えていたので、対話のための開かれたプラットフォームをアジアに導入するため、IETM と協力しシンガポールで IETM サテライト・ミーティングを開催した。

現在までにアジアでの IETM ミーティングは、中国、韓国、日本で行われ、この6月にはインドネシアで開催する。ジャカルタのミーティングでは、オープンでインフォーマルなかたちで、情報交換、成功事例、制作の最良モデルと共有しようと提案している。

さらに、アーティストが居住する場所へ移動し、作品が生まれ出される環境そのものへ入り込んでみるといいと考えている。私は、エキゾチックなものを警戒する必要はないと考えている。エキゾチックなものは素晴らしいものであり得、植民地主義の後遺症を引きずる必要はない。まず第一歩になるのは、他者に魅惑されることであり、フェアなアプローチ、段取りに気をつけることが大事になるのはその後だ。アーティストの創造の

源泉となる自然を共有しなければ、アーティストの持つ風景がわからない。

理想的なミーティング・ポイントは、まずアーティスト志向型であるべきである。第二に、作品の売り買いのロジックから離れて、プロセス志向型でなければならない。また、リサーチ志向型であるべきだ。ここにはアーカイブを作るためのロビー活動も含まれる。最後に、当然、対話志向型でなければならない。意見が違っても対話が続けられるようなプラットフォームは、アーティスト同士の個人的な対話から、学者や専門家がリサーチの成果を我々と共有するようなセミナーに至るまで、あらゆるスケールで実践されるべきだと考える。

○塩谷陽子氏

ニューヨークのAPAPという舞台芸術のアンプレラ・オーガニゼーションが、毎年1月にアニュアル・カンファレンスを開催し、それがAPAPと呼ばれている。カンファレンスとは言っているが、産業見本市のようなブースがヒルトン・ホテルに300程並び、そこをメイン会場としている。参加者には、ブース会場を中心に集まって舞台芸術を売り買いする「マーケット」の人々と、ブースを便宜上のハブとしながら、レイセン氏が前述したようにアーティストと一緒にものをつくってゆくタイプの人々の二通りある。

この2種類のプレゼンターはまったく異なった人々であり、「マーケット」という言葉を使用する際は、前者の、エージェントと付き合いながら劇場を埋めていくという含みがある。TPAMはマーケットと称してはいるが、むしろ後者のプレゼンターを対象としてきたのではないかと思っている。米国では、後者のプレゼンターを、アーティストの創作活動をサポートし、予算面に責任をもちながらプロダクションの提供をする人という意味で、「プレゼンター／プロデューサー」と言ったりする。

プレゼンター／プロデューサーであるには、まずリサーチが必須である。例えば、アーティストに新作の委嘱をしたり、あるテーマでシーズンを組みたいと思ったとき、情報を持っていなければ、誰と話せばよいのか分からない。さらに、合同プロデュース／プレゼントをしてツアーという形状をとる場合、リサーチが行われていなければ、どのプレゼンター／プロデューサーに話を持っていけばよいか分からない。3～4人の仲間を集めれば、経済的な負担も軽くなり、新作をつくる場合は、上演回数を重ねるごとに作品自体がシェイプアップされ、より広いパブリックに向かって語れるような強度をもった作品になってゆくという面もある。また、あるアーティストがあるキャリアの段階にいたので、次にこういったことをするのが彼の興味やベネフィットにつながっていくだろうといった発想も可能になってくる。そういった意味で、リサーチは非常に重要である。

リサーチの方法には二つある。まずは、生の舞台を見ること。ある作品を1回見て、さらに同じ作家のものを2回、3回と見てゆくと、DVDで見てもある程度想像がつくという段階になる。さらに、多くの作品を見ている人たちと会い、ある作品についての意見交換をすること。自分とは違った見方をしている人と会って話すことによって、作品理解につながったり、もう1回見てみようと思わされたりする。

こういった意見交換はメールだけでは不十分で、やはり実際に会って話すことが非常に重要になってくる。多くの人が集まり、「あの作品は見たか?」「あの作品はどうだったか?」と、直接話すことができるということが、ミーティング・ポイントとしてのAPAPの最大のメリットであると考えている。

4氏の話の後、作品の創造、流通、アーティストを支える仕組みと国の文化政策について議論が及び、システムよりもそれを牽引する人材の重要性や、継続的な教育と訓練から、創造、プロダクション、流通、ドキュメンテーションまでの価値体系の連鎖の重要性についても言及された。

また、日本での文化政策が変わろうとしていることを受けて、ヨーロッパでは芸術が制度化されており政府によって組織立てられているが、機能不全に陥っている面が多々あり、模範とすべきモデルではないといった発言や、シンガポールではアーツ・カウンシルが発足し、企業の寄付が集まる一方、アート関連団体は企業のスポンサーシップを失っており、アーティストはアーツ・カウンシルとその時々の方針に依存する度合いが高まってきているといった報告もあった。

さらにレイセン氏から、日本の劇場法に関する議論について、必要なのは政府が直接アーティストをサポートすることであり、劇場経由であってはいけないこと、劇場へ助成するのであればディレクターとしてやる気と知識とスキルのある新しい人材が必要であり、劇場は現在のドイツのように厳格なルールでアーティストを縛るべきではないなどの提言がなされた。

## ◆財団法人地域創造主催セミナー

### 広がるアウトリーチの可能性～文化・芸術と教育・福祉分野の連携について～

3月3日 [水] 10:00～12:00 / 東京芸術劇場 中会議室

コーディネーター：吉本光宏 [(株) ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室長]

パネリスト (五十音順)：

苅宿俊文 (青山学院大学教授 / NPO 法人学習環境デザイン工房代表)

近藤良平 (コンドルズ主宰 / 振付家 / ダンサー)

桜井里二 (社会福祉法人秀峰会 理事長)

津村 卓 (財団法人地域創造プロデューサー)

地域創造は平成 20、21 年度の 2 カ年にわたり、アウトリーチの課題や将来展望を見据えた調査研究事業を実施してきた。今回のセミナーは、現在取りまとめの段階にきている当調査研究事業のエッセンスを紹介するものとなった。

吉本光宏氏の進行で、まずパネリストの近藤良平氏と桜井里二氏から、映像によって両氏の携わる活動が紹介された。

近藤氏は埼玉県の企画した障がい者と一緒につくるダンス公演『突然の、何が起こるか分からない』について、作品創作の過程を含めて紹介。桜井氏は苑長を務める特別養護老人ホームさくら苑の取り組みとして、作曲家の野村誠さんが 10 年以上にわたって行ってきたプログラムを紹介された。

青山学院大学の苅宿俊文教授からは、学校教育の視点からアウトリーチを行うことの意味について話があり、「アウトリーチは感動を分かちあう場づくりである」とコメント。さらに、公共ホールが教育などと連携するためには、学校が社会と結びつくときには学校だけではできないということを踏まえて、学校を支援するグループや学校と地域を繋ぐコーディネーターと協力体制をとることが必要と話された。

また、地域創造プロデューサーの津村卓氏からは公共ホールにおける自主事業やアウトリーチの実施状況、教育や福祉との連携状況について紹介。

その後、これからのアウトリーチの可能性について議論された。芸術は「何が起こるか分からない」という偶発性を誘発する力があることや、公立文化施設の職員だけでなく、教育や福祉の関係者と一緒に情報を共有していくことが大切だといった意見が出された。

## ◆再考・都市と芸術—新たな関係を求めて

3月3日 [水] 16:00～18:00 / 東京芸術劇場 中会議室

言語：日本語 / 英語同時通訳

スピーカー：

ジュード・ケリー [サウスバンク・センター芸術監督 /

ロンドンオリンピック 2012 文化教育委員会最高責任者 / メタル代表]

アンディ・フィールド [フォレスト・フリンジ ディレクター]

甲斐 賢治 [NPO 法人記録と表現とメディアのための組織 (remo) 代表理事]

金森 香 [シアタープロダクツ プロデューサー]

中村 茜 [precog 代表]

モデレーター：吉本光宏 [(株) ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室長]

当セミナーはテーマをあえて広く設定し、「都市と芸術」をめぐる様々なディスカッションと意見交換を生むべく開催、日英のスピーカーが企画者として手掛けるプロジェクトを紹介することから始められた。

#### ○アンディ・フィールド氏

常に物語、出来事、イメージ、音、人々で充満するカオスとしての都市に、劇場、美術館、ギャラリーなどの芸術のための空間をつくることは、健全な都市に不可欠とみなされているが、こうした従来の芸術についての捉え方とは別の考え方が存在する。

ティム・クローチは、「演劇には『場』というものはひとつしかない。それは観客である」と言っている。これは、芸術を「対象」としてではなく「体験」と捉える考え方である。つまり、演劇の「場」はその都市に住んでいる「人々」であり、そして演劇はその人々が都市ともつ「関係」のことであり得る。そう捉えると、芸術が都市において達成できることの可能性は無限に広がる。

デジタルテクノロジーと都市の関係を検証しているブラスト・セオリー、グラエム・ミラーの音響インスタレーションなどは、「都市を再構築し、再想像する方法としての芸術」「戦略や姿勢、物の見方や物事の行ない方の芸術」であり、これらの作品は都市との新しい関係の持ち方を提出している。

都市が常に書き換えられるテキストだとすると、こうした芸術は、そのテキストを読む新しい方法、都市を体験する別の方法になり得る。芸術は、「都市とは何か、それがどう機能しているのか、どうしたらより良く機能するのか」を考える重要な方法として理解されるべきである。

自身が企画・開催する「フォレスト・フリンジ・マイクロフェスティバル」は、上に挙げたようなタイプのプロジェクトを、都市で行うだけでなく、巡回させる試みである。世界中の人々に自分の町について改めて考え、まったく違った視線でその都市を見るようなチャンスを提供したい。

#### ○金森香氏・中村茜氏

2009年9月26・27日に開催した「スペクタクル・イン・ザ・ファーム」は、日々多くの催しで溢れている東京という都市の一面を独自の視点で切り取り、那須という地方に出現させた催事で、一泊二日の会期中にファッション、ダンス、演劇、音楽、美術、文学、食など150名のアーティストが一堂に会して行われた。東京からのバスツアーもあり、朝、那須に到着した後、リバーサイドでの野外コンサート、旅館の宴会場では演劇やダンス、夜には著者による作品の朗読会をお酒を飲みながら楽しむ。翌日、早朝からのファッションショーでは、動物園を会場にモデルと動物たちがウォーキングをし、パフォーマーも加わってストーリー仕立てのショーを行ったり、ライブパフォーマンスを牧場で行うなど、様々な場所を「劇場空間」に仕立てて行われた。

当イベントでは、「旅行的な感覚」で、例えば、ミュージシャンとダンサーがひとつのステージをつくるなど、異なるアート分野のアーティスト、さらには異なる分野に興味を持つ観客同士が出会い、交流できる、新しいタイプのプラットフォームを創出することを目指した。地域の人同士のコミュニケーションも活発になり、次の開催も予定している。

#### ○甲斐賢治氏

remoでは、「メディアを通じて知る、表現する、対話する」という3つの視点で、映像を中心とするメディア・アートの表現活動を促し、一般の人が映像を「文房具」として活用することを普及させ、映像を囲む新しい場づくりを行なっている。当セミナーでは人の野生、衝動を束縛する制度である都市から抜け出る手立てとしての映像を紹介しつつ、都市と芸術を考察する。

ワークショップ「remoscope」では、「カメラ固定、およそ1分、無編集、無加工、無音、ズームなし」というルールの下で撮影する。都市を考えると「いかに広角的に考えないか」ということが重要であるが、ここには、感覚にそって規定された制度を超えてゆく「個人の視点」が映像として残る。

ミシェル・ゴンドリーが開発したワークショップでは、2時間半で既存のコミュニティが集まって映画をつくる。伊丹で行なったケースでは町内会の人々が脚本書きから始めて作品をつくった。英国のケースでは、1984年に起こった炭鉱町の労働紛争を、当事者だった人たちを含めて再現した。ここでは共有される視点としての映像が人に考える契機を与える。

都市で芸術がなされるとき、実は新しい「枠組み=制度」をつくっているだけのものもあるように思うが、

芸術の柔軟さが、制度を理解し、読み取り、時にそれに抗って感覚を開き、協働を促して、学習機会を取り戻すために働いてほしい。

3名のプレゼンテーションに対し、ジュード・ケリー氏は、「アイデアはコントロールできない環境から生まれる」ということが反映されていたと述べ、H.G.ウェルズの「芸術とは、私たちがそこをくぐって逃走し、私たちが考えたり経験したり超越したり対決したりできるような、別の空間へ入っていくことができるドアを壁に開ける必要性のことである」という言葉を引用して、アーティストが形式と内容においてだけでなく、文脈においても作り出すべきものがあるとこと、さらに、体験型作品、遭遇型作品は、観客がアーティストを「思考の作り手」として見ることを可能にするとした。

また、巨大な都市においては、人間は高度な親密さを求め、こうした規模の問題へのリアクションとしてYouTubeが発明され、小規模な身振りを追求するアーティストが生まれる。現代生活においてアーティストは「つなぐ」という役割を果たしており、芸術は制度化された場所に、知性と人間性を与えるために存在していることを常に念頭に置かなくてはならないと締めくくった。

議論はさらに、既存の劇場の中で行われる芸術について、SNSと芸術、フラッシュモブの話題などへ及び、様々な切り口で意見交換がなされた。

## ◆都市に浸透する「劇場」空間— イギリスの舞台芸術から

3月4日 [木] 10:00~12:00 / 東京芸術劇場 大会議室

言語：日本語／英語同時通訳

提供・協力：ブリティッシュ・カウンシル

モデレーター：住友文彦 [キュレーター／NPO 法人アーツイニシアティブトウキョウ]

スピーカー：

タソス・スティーヴンス [コニー ディレクター]

マット・アダムス [ブラスト・セオリー主宰者]

ダンカン・スピークマン [アーティスト]

塚原悠也 [contact Gonzog ダンサー]

exonemo (エキソニモ) [アーティスト]

当セッションでは、都市、パフォーマンス、新しいメディアなどのキーワードを切り口に、ジャンルを超えた日英のアーティストの試みを紹介した。

○マット・アダムス氏

ブラスト・セオリーの探ろうとしているテーマのひとつはゲームという概念をめぐっており、ゲームの芸術的な可能性を引き出すにはそれをどう活用すればよいかを考えている。また、都市のストリートに作品を持ち出し、都市を芸術活動の背景ととらえるとどうなるか、さらにアーティストの役割自体を組み替えることを試みている。

我々はまた観客とどうコラボレートするかにも関心がある。誰をパフォーマーとみなし、誰を観客とみなすかという問を作品を通して探り、新しいデバイスやテクノロジーが、周りの人間との関係のありかたをどう組み替えるのか、そうした変化の社会的、政治的可能性とはどういったものなのか探りつつ作品をつくっている。

『Rider Spoke』では、参加者たちが夜の街にそれぞれ自転車を出てゆき、街の所々でいろいろな質問に答え、同時にそれを録音し、他の参加者がその録音を聴くことができる。都市のWi-Fiネットワークを通してその録音が地図上に位置づけられ、地図はリアルタイムで生成される。Wi-Fiネットワークと動きに応じて変化する地図は、都市のコミュニケーション空間は常に変容し、瞬間ごとに構築されているということを示す作品全体のメタファーになっている。この作品では、私的なものと公的なものの新しい境界線をどうナビゲートするか、プライベートな空間をパブリックな空間へ入れ込むということを狙った。

## ○ダンカン・スピークマン氏

私はモバイル・テクノロジーやモバイル・デバイスがいかにうまく私たちから離れた場所や遠くの人々と結び付けるかということに興味をもっている。作品では、イヤホンをつけて都市の音響的な空間から切り離されるかたちで世界を見てもらい、サウンドトラックが終わりイヤホンをとると元の環境に引き戻されるが、イヤホンをつけていたときに周りの環境を見たやり方の記憶が残っており、それによってそこに何があるのかを音響的にも視覚的に理解し始めるという体験を意図している。

サトルモブというのは一種の「形式」である。フラッシュモブが「自然発生的に」起こる「群衆」の行動であるのに対し、subtle＝さり気ない、繊細な、小規模なものをつくりたかった。参加者に事前にMP3 ファイルをダウンロードしてもらい、都市のあるエリアに集まり、再生ボタンを同時に押しもらう。MP3 ファイルには二種類あり、参加者は二手に分かれる。一方に「パートナーの肩に手を置いてください」などシンプルな指示が与えられ、他方には、それを映画の場面のように描写する声が聞こえる。両者の役割が入れ替わることもあり、参加者はパフォーマーになったり観客になったりしながら、最終的にある種の間地点に行き着き、その瞬間に、パフォーマーと観客の境界線が崩れはじめる。

この作品でやろうとしたことは、小さな瞬間を観察するとき、それにサウンドトラックがついていると、突然周りの全ての出来事や瞬間が観察に値するものに変化するという一方で、「世界を新しい目で見ることほど世界を大きく変えることはない」という考え方に帰着する。

## ○タソス・スティーヴンス氏

コニーは、ライブでインタラクティブなプレイ、アドベンチャーをつくるエージェントであり、ここで言う「ライブ」とは、「参加者に反応を返し、参加者がいるその場所に反応を返す」ということを指す。我々の作品は、観客に語りかけ、観客の話を聞く。つまり観客自身が作品である。できるだけシンプルなデジタルテクノロジーを使うのは、観客がどこにいてもイベントを体験できるためである。

ロンドン・ナショナル・シアターの中とその周辺で行なった『NTT』というアドベンチャーでは、観客はラビット（兎）の案内でこの公共施設の駐車場や搬入口など、普段は行かない空間を探索する。ストーリーに建物とそこで働く人のリアリティを使い、できる限りフィクションを少なくすることで、何がリアルで何がフィクションか分からない状態、あらゆるものが作品の一部であり得るという状況になり、観客の知覚は高められ変容する。

北京でやった『Hutong』では、自分が住んでいる近隣地域の地図に、好きな大きさとで長方形を当てはめ、その四辺に沿って、本屋、寺、時計、犬、幸福な風景などの目印を探して歩く。こうしたゲームをすることによって、参加者は自分の近隣を違った目で見られるようになり、世界中の見知らぬ土地の見知らぬ人とのつながりができ、日常生活の美と平凡さ、共通性と差異、場所のアフォーダンスを発見することができる。

『Hutong』は、世界各地の誰でもが、自分の住む場所でやることのできる。私は、どうしたら、同じ作品が共通性を保ちながらも、それぞれ異なった場所や異なった参加者に応答可能な形でリメイクできるかということに関心がある。

## ○Oxonemo 千房氏・赤岩氏

フランスのニームで街中を使ったインスタレーションを行なった。街の4カ所に顔写真を撮影し、プリントアウトできるブースを設置する。顔写真は、顔の一部分だけが切り刻まれた状態でプリントされるようになっており、自分の顔を完成させるためには、4カ所を巡って写真端末を探し出して、重ね撮りをしなければならず、自分自身を完成させてゆくことと、街の中に入り込んでゆくことが重なった状態が起こる。さらに、撮影された顔の断片はネット上に送信されており、夜、街の中心にある遺跡にプロジェクションされる。撮影されたさまざまな人の顔がランダムにミックスされ、誰でもない人の顔が自動的につくられていく。参加者は昼間には個人的な動機でこのゲームに参加しているわけだが、夜には個人的なものは取り払われアノニマスになるといったことを狙った。

バスで日本を3週間かけて回るMobLabというアートプロジェクトの一環として行なった『The Road Movie』では、移動するバスの前後左右と上方向にウェブカメラを取り付け、5分おきに撮影した。撮影された景色は折

り紙の型紙になり、Google マップの GPS 情報によってウェブに蓄積されてゆく。その瞬間の型紙をダウンロードし、プリントアウトして折ると、周囲の風景が再現される。立体として再現された風景は、ウェブカメラの向こう側よりもリアリティがあり、遠方の空間へ侵入する感覚、ともすればバスで移動する以上に旅する感覚を人に与える。

『Fragmental Storm』は PC 上の作品で、任意のキーワード検索で見つかった画像や文字を画面上に自動的にコラージュする。この作品を iPhone アプリに移植した際、GPS 機能を利用して住所でサーチした画像や文字も画面上に出てくるようにした。移動によってデータが更新され映像が変わっていくと、移動する感覚が加速し、場所に対する意識がよりリアルになる。普段気づかないものを、こういったデバイスによって知らされるということがある。

○塚原悠也氏

都市というルール、制度をどう読み変えるか、都市と積極的に関わってそれをポジティブに乗り越える、遊ぶというスピーカー諸氏の発想に共感する。コンテンポラリー・ダンスは舞台芸術のフォルムのなかで一番自由があり、何事もそのままの形で芸術として成立し得る場所なのではないかと感じていたが、やはり作品をつくる作法や所作に暗黙のうちに共有されているルール、制度があり、そのことに不満を感じていた。

2006 年に垣尾優というダンサーと何かやろうということになったとき、非常に自然に、そういったコンテンポラリー・ダンスという制度から離れてしまった。公園の木から落ちようとする葉を全速力で走って行って拾うのを映像に撮るということから始め、コンタクト・インプロヴィゼーションのメソッドを借りて接触することを試し、さらに武術の技を借りてお互いを殴ったり、蹴ったり、とび跳ねたりすることを試し、その様子を YouTube で次々に公開していった。

「contact Gonzo」という、何らかの“ノリ”は説明できるが曖昧な名前をつけたのは、自分たちが作ってしまったルールをより自然な形で改変できるようにするために、YouTube を見て、僕らの方法論を改造して楽しむ人が出てくることを望んでいる。ある運動体が形を変えながら進化する過程で、その進化に大きく寄与するのは恐らく“エラー”や“勘違い”ということで、そこから強度のあるものが生まれてきたとき、それをオリジナルがどう乗り越えられるのかといったところにしか、僕らが続けていく理由がないのではないかと考えている。ルールがあるからゲームであるわけだが、ルールのデザインの仕方にはさまざまある。スピーカー諸氏の、それによって街をどう読み換えていくかという方法論は非常に興味深く、参考にしたいと考えている。

会場からは、各氏の活動についてのプレゼンテーションを受けて、作品のスケールを拡大することは可能か、そうしたときマス・プロテストや大きなイベントを活性化するポテンシャルを持つかといった質問や、パブリックでインタラクティブな場所においてこうした芸術体験がもたらすある種の危険と、それによって引き起こされる不安や恐怖の感情、その重要性などについて意見交換が行われた。

## 08. スタジオ・ショーイング／ワークショップ

3月1日[月]～4日[木]／東京芸術劇場 リハーサルルーム（地下2階）

### ◎参加団体

#### <スタジオ・ショーイング> 計10団体

大橋可也&ダンサーズ／開幕ペナントレース／CAVA（さば）／柴田恵美／鈴木ユキオ（金魚）  
スタパフォ（武元賀寿子ほか）／DAZZLE／朱鷺色卵／富士山アネット／ミホプロジェクト

#### <ワークショップ> 計3団体

大野慶人（国際舞踏連絡協議会）／JOU +サト・エンドウ／d'UOMO ex machina + COLLOL

東京芸術劇場のリハーサルルームを活用することによって、スタジオ・ショーイング／ワークショップを実施した。東京芸術見本市では、さまざまな方法で各出展団体の活動を紹介するプログラムを提供している。しかし、特に一部の実演家からは、ブース・プレゼンテーションやヴィジュアル・プレゼンテーションは、実演の「代替手段」であり、フル・サイズの上演は無理でも、シンプルなショーイングも平行して行いたいという要望があった。同様に、「ほんの少しでも動いているところが見てみたい」という声は、特に海外からのビジターからもあった。

そこで、今回はリハーサルルームを使用できることから、ブース／ヴィジュアル・プレゼンテーションと TPAM ショーケースの参加団体に対して、スタジオを開放したところ、多くの出展団体がショーイング・ワークショップの実施を希望した。

初めての試みだったので動員についての懸念があったが、実際には多く人が集まり、とても好評だった。ショーイング／ワークショップの時間割は直近まで決まらなかったため、Website に、また当日の早朝にその日のプログラムをメールで配信していたのだが、そこにも情報を掲載。会場内にも時間割を張り出した。ブース／ヴィジュアル・プレゼンテーションでショーイングの日程を告知する出展者もいた。なかには、評判を良く、希望者もあったため、スタジオの空き時間を使ってショーイングを「アンコール」した出展者もいた。

舞台芸術の見本市である以上、実演を見せる機会は、出展者からも、ビジターからも大きく切望されていると思われる。今後、より多く実演の機会を提供できるプログラムを考えていかなければならないと改めて確認した。



## 09. スピード・ネットワーキング

3月2日(火) 10:30 ~ 11:30 / 東京芸術劇場 大会議室 (5階)

3月3日(水) 10:00 ~ 11:30 / 東京芸術劇場 小会議室 6 (6階)

今年は、アーティストとプレゼンターが1対1のミーティングを持てる「スピード・ネットワーキング」を創設した。当プログラムでは、事前に事務局でプレゼンターを選定し、ミーティングを持ちたいアーティストを募集、事務局で日時の調整を行い、実施した。初の試みということもあり、募集の開始が遅れたが、短い期間に予想を大きく上回る申し込みがあった。検討の結果、開始時刻の前倒しと時間延長をプレゼンター諸氏に打診したが、直前にも拘わらず快諾いただき、アーティストの希望にできるだけ沿ったかたちで実施することができたのではないと思う。また、枠が埋まり希望のプレゼンターとのミーティングができないアーティストについては、時間外でも事務局スタッフが間に立って紹介するなど、出会いの機会を逃さないよう柔軟な対応を心がけた。

海外プレゼンターと英語でコミュニケーションができるか危惧するカンパニーもあったが、当日は全団体が英語の堪能な人員を同行し、事務局でサポートをする必要はほとんどなかった。また、会場については、狭い小会議室の方がプレゼンターとの距離が縮まり話が盛り上がったという感想があり、今後の参考にしたい。事前の準備には課題を残したが、参加者の評価は非常に高く、継続を望む声が多数を占めたプログラムであった。

### ◎参加プレゼンター

3月2日(火)

近藤恭代 (金沢 21 世紀美術館 チーフ・プログラム・コーディネーター [日本/金沢])

Pankhuri AGRAWAL (Senior Programme Executive, Attakkalari Centre for Movement Arts [India/ Bangalore])

Constantin CHIRIAC (Director, Sibiu International Theatre Festival [Romania/Sibiu])

Sandro LUNIN (Artistic Director, Zürcher Theater Spektakel [Swaziland/Zurich])

György SZABÓ (Director, TRAFÓ—House of Contemporary Arts [Hungary/Budapest])

3月3日(水)

藤田直義 (高知県立美術館 館長 [日本/高知])

Mark BALL (Artistic Director and Chief Executive, LIFT - London International Festival of Theatre [UK/London])

KIM Seong Hee (Director, Festival Bo:m [Seoul/Korea])

KIM Seo-Ryoung (General Director/Executive Producer, ChangMu International Dance Festival /  
EO Creative [Seoul/Korea])

Mojca JUG (Programmer of The Venue and The Festival Mladi Levi, Bunker [Slovenia/Ljubljana])

PARK Byung Hoon (Chief Manager, Programming Dept., Geoje Arts Center [Seoul/Korea])

Tina RASMUSSEN (Director, performing Arts, Harbourfront Centre [Canada/Toronto, Ontario])

Priit RAUD (Artistic Director, Kanuti Gildi SAAL/Baltoscandal festival [Estonia/Rakvere])

### ◎参加アーティスト

ARICA/大橋可也 & ダンサーズ/柿喰う客/サト・エンドウ/CAVA (さば) /JOU/鈴木ユキオ (金魚) /  
DAZZLE/d'UOMO ex machina + COLLOL/朱鷺色卵/高襟/富士山アネット/Miho Konai (幸内未帆)  
/Yuzo Ishiyama / A.P.I.



## 10. レセプション

### ■ オープニング・レセプション

3月1日(月) 17:00~18:30/東京芸術劇場 中ホール ロビー

オープニングスピーチ：国際舞台芸術交流センター 中根公夫理事長

今年は、初日の中ホールでの音楽ショーケースが始まる前に、中ホールロビーでオープニング・レセプションを開催した。音楽ショーケースには、整理券で入場する一般観客が150名強いたが、レセプションの撤収と、レセプション参加者のショーケース会場への誘導、その後の一般観客の入場と、タイムテーブルを綿密に組んだ甲斐があり、スムーズに進行することができた。また、去年はクロークの対応に手間取り受付が滞った場面があったが、今回は東京芸術劇場にクローク及び担当スタッフを提供頂き、十全の体制をとることができた。



スピーチで、次回の開催地が東京から横浜に移ること、主催者の体制が大きく変わることなどが告知されると、レセプション中に多くの参加者が詳細を尋ねに来られ、当催事への期待の大きさを改めて感じさせられた。

### ■ クロージング・パーティ

3月4日(木) 18:30~19:30/東京芸術劇場 小ホール2 ロビー

恒例のクロージング・パーティは、最終プログラムである演劇ショーケースの直後に、ショーケース会場である小ホールのロビーを使って行った。昨年のクロージング・パーティ会場に比べ、手狭で閉じられた空間であることが危惧されたが、満席のショーケースの観客がほぼそのまま流れてきたロビーでは、逆に人と人との距離が近いことが奏功して、隣にいる参加者へ気軽に声をかけられるような雰囲気が醸成されていた。

また、例年に比べ、東京芸術劇場の外で「TPAM ショーケース」を行っていたカンパニーが多く来場していた。直前が演劇のショーケースだったこともあり、特に若手の演劇団体のメンバーの参加が目立ち、自身の自分たちの公演中に TPAM に来場できなかった分、できるだけコミュニケーションをとろうという熱意を感じた。

クロージング・パーティでは、「自分の知らないことを知ることができる場であり、自分たちのことを知ってもらえる場。2日しか参加できなかったが、もっと参加できればよかった」という感想を初参加のカンパニー制作者から聞けたり、また、常連のアーティストからは、「今年の内容は充実していた。今後の TPAM のために自分も意見を出していきたい」という声も聞くことができた。



全参加者が一堂に集まるクロージング・パーティでは、催事直後の生の声を聞くことができる機会であり、そうした参加者の感想を丁寧に拾い、次年度以降のプログラムに生かしていきたいと考える。

## 11. パブリシティの記録

### ◎国内新聞 5紙

共同通信（共同通信社）	2月中旬配信
信濃毎日新聞（信濃毎日新聞者発行）	2/25（木）掲載
週刊オン★ステージ新聞	2/26（金）掲載
高知新聞（高知新聞社）	2/26（金）掲載
中部経済新聞（中部経済新聞社）	3/4（木）掲載
音楽舞踊新聞（音楽新聞社発行）	6月号掲載（予定）

### ◎国内雑誌・情報誌 9誌

邦楽ジャーナル（邦楽ジャーナル発行）	11/1 発行・11月号掲載
シアターガイド（モーニングデスク発行）	11/2 発行・12月号掲載
wa（福岡市文化芸術振興財団発行）	12/25 発行・44号掲載
月刊イベント・レポート（インタークロス研究所発行）	1/13 発行・vol.329 掲載
ビジネスチャンス（株式会社ビジネスチャンス発行）	1/22 発行・3月号掲載
サウンド&レコーディング・マガジン（リットーミュージック発行）	3/15 発行・4月号掲載
月刊イベント・レポート（インタークロス研究所発行）	5/10 発行・vol.333 掲載
季刊ダンサーズ（ダンスカフェ発行）	6/1 発行・No.32 掲載
サウンド&レコーディング・マガジン（リットーミュージック発行）	8/12 発行・9月号掲載

### ◎国内英文雑誌 1誌

METROPOLIS（メトロポリス株式会社発行）	2/12 発行・829号掲載
--------------------------	----------------

### ◎国内ウェブサイト（主要なもののみ）

企業メセナ協議会（社団法人 企業メセナ協議会）	
演劇番組・テアトルプラトール（テアトルプラトール有限責任事業組合運営）	
CINRA.net（株式会社 CINRA 運営）	
Fringe（fringe 運営）	
REAL TOKYO（REAL TOKYO 運営）	
STUDIO VOICE online（STUDIO VOICE 運営）	
アートスケープ／artscape（大日本印刷株式会社運営）	
moonlinx（moonlinx 運営）	
CBCNET（株式会社グランドベース運営）	
Web DICE - 骰子の眼（アップリンク運営）	
white-screen.jp（株式会社ニューズベース）	
J-messe（株式会社トーテック運営）	
METROPOLIS（メトロポリス株式会社運営）	
The Finnish Institute in Japan（フィンランドセンター運営）	
Tokyo Art Beat（NPO 法人 GADAGO 運営）	
ケベックインターナショナル（在日ケベック州政府事務所）	
シアターリーグ（有限会社 moon-light 運営）	
演劇交差点（フォルス・スタート商会運営）	他、参加団体ウェブサイトなどに多数掲載。

### ◎海外新聞・配信 5誌

Morning Daily KOMPAS（インドネシア）	2/15（月）掲載
AFP - Agence France-Presse（フランス）	2/26（木）配信
Morning Daily KOMPAS（インドネシア）	2/28（日）掲載
Guardian（英国）	3/2（火）掲載
国民日報（韓国）	3月上旬配信

◎海外ウェブサイト（主要なもののみ）

On the move（IETM 運営）

Gig - International Arts Manager（Impromptu Publishing 運営）

Association of Asia Pacific Performing Arts Centres（AAPPAC 運営）

Contemporary Performance（Contemporary Performance 運営）

KadmusArts（KadmusArts 運営）

他、参加団体ウェブサイトなどに多数掲載。

◎主な当日取材

**亀井克浩氏（月刊イベント・レポート編集部 記者）**

取材内容：見本市全般、事務局長インタビュー

媒体名：月刊イベント・レポート

**北嶋 孝氏（Wonderland 編集長・ジャーナリスト）**

取材内容：見本市全般

媒体名：レビューマガジン Wonderland（ノースアイランド舎運営）

**小林宏彰氏（CINRA ライター）**

取材内容：見本市全般

媒体名：CINRA（ノースアイランド舎運営）

**塩崎淳一郎氏（読売新聞東京本社文化部 記者）**

取材内容：平田オリザ VS 岡田利規対談取材

媒体名：読売新聞

**張 智盈 [ジャン・ジョン] 氏（韓国国民日報ライター）**

取材内容：見本市全般

媒体名：韓国国民日報

**竹尾文博氏（中部経済新聞 東京支社編集部 記者）**

取材内容：見本市全般、あいちトリエンナーレ取材

媒体名：中部経済新聞

**田中伸子氏（ジャパントゥタイムズ学芸部 演劇ライター）**

取材内容：見本市全般

媒体名：ジャパントゥタイムズ

**長谷川六（ダンスワーク舎代表）**

取材内容：見本市全般、海外ダンス・ショーケース取材

媒体名：旬刊 音楽舞踊新聞

**安田 敬氏（ダンサーズ編集長）**

取材内容：見本市全般、ダンス・ショーケース取材

媒体名：ダンサーズ（ダンス・カフェ発行）

**吉田恭子氏（日米カルチュラル・トレード・ネットワーク・ディレクター）**

取材内容：アラン・パレ氏（CINARS CEO）インタビュー

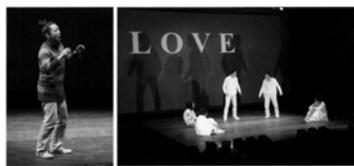
媒体名：国際交流基金「Performing Arts Network Japan」











↑国際ショーケース・ショーケース 舞臺劇(演劇)と東京ダンスロック(6)



↑国際ショーケース・ショーケース:コンテンポラリー・ダンス・カンパニー(インドネシア)



↑J-Hallリハーサルルームを使った舞木ユキオ(他鳥)のスタジオ・ショーイングの様子



↑TPAM参加者同士、一対一で10分間のミーティングを持つプログラム「スピード・ネットワーキング」

REPORT

演劇、パフォーマンスなどの舞台芸術を見ていくと、普段の生活で知らず知らずと要領した心が次第に軽くなっていくのを感じる。舞台芸術にはそういった人の心を自由にすることができる。その表現方法は、特別な知識がなくても伝わるプリミティブなもの、はじめて観る人でも十分に楽しめるものだ。にもかかわらず私自身、実際に舞台芸術に触れるまで、なんとなくアカデミックで敬遠の高いもののように感じていた。それは「とことん個人であろうとする」アーティストの姿を、意識的なまなざしで見つめると崇高で難解に見え

ていたからなのかもしれない。今回で14回目を迎えたTPAMは、舞台芸術の認知を広げ、作品の流通を促進するための見本市。各ブースからの情報発信、生のパフォーマンス、セミナー、映像によるプレゼンテーション、パーティーを通じたコミュニケーションなど、業界内の交流が活発に行なわれ、会場には海外からの来客やアーティストの姿も数多く見られた。また、池袋の街を舞台にした参加型のパフォーマンスが行なわれるなど例年にはない実験的な試みも行なわれた。TPAMでは、アーティスト・作品・制作者・観客と舞台芸術をとりまく環

境をいかに構築していくかなど、舞台芸術を単純に売り買いする場にとどまらず、舞台芸術の未来を考える場となっていた。グローバル化が進み、世界が共通で解決しなければならない問題に直面している現在、国境や立場を越え、人と人の心をつなぐ芸術の果たす役割はますます大きくなってきている。良質なパフォーマンスや作品が多く流通されていくには、アーティストだけでなく制作者、観客に届くまで、マーケット全体の成熟を促す必要があるのだと感じた。(3/2 滝 竜井克浩)

国際舞台芸術交流センター (PARC) 理事 東京芸術見本市 (TPAM) 事務局長 丸岡ひろみ インタビュー
今回の参加団体、海外からの参加国数は?
(国際ショーケース・ショーケース含む)
ブース・プレゼンテーション: 50団体 ワールド・プレゼンテーション: 20団体 TPAMショーケース: 28団体
国際ショーケース・ショーケース: 18団体
計: 116団体 (国数のプログラムに追加した団体の数を含む)
海外からの参加国数: 33の国と地域から 計202名

Q1. TPAMを開催するきっかけは?

90年代のはじめ、国内カンパニーの海外公演数が少なく、輸入超過の状態だったことが背景としてありました。当時、カナダにCINARS、ドイツにフランクフルト・メッセ、フランスにはMARSという舞台芸術の見本市があり、PARC理事長の中根公夫が日本派遣団を組織して参加した経緯から、いつか日本にも舞台芸術の見本市をつくりたいという思いが

ショナル・ショーケース」がスタートし、実演を見る機会をより多く提供できるようになったのが非常に大きなことでした。2005年からは、それまで基本的に舞台芸術の全ジャンルを対象としてきたのを、限られた予算、限られた期間のなかで公共資金を投入して行うマーケットとして、どこを対象に実施すべきか再考した結果、特にチケット収入だけで成立することが難しく、かつ国際的マーケットの存在を同時代の舞台芸術を紹介することに注力し、同時に海外とのネットワークを強化してきました。

Q3. この10年間にソウル、シンガポールと舞臺見本市の開催がふえましたが、東京だけでなくアジアのダンスの隆盛がはつきりとしつつあります。東京の位置付けは変わったのでしょうか?
その中で東京ならではの特長は何でしょうか?

何をもってダンスの隆盛とするのか難しいですが、ソウル

フェスティバルしかなかったわけですが、それは主に国外のものに国内で紹介するものでした。それに対して、アジアから発信することを担ってきたのは見本市と呼ばれる業界の一端であり、各国が競合するとうり、アジア全体で国際競争力を高めていくような盛り上がりを見せているように思います。

Q4. 世界的な不況の中でTPAMの予算は毎年、厳しいのではないのでしょうか? (今回は大きい会場でしたので、前回は大きく減額でした)

2010年について言えば、東京芸術劇場の会場費協力、さらにブリティッシュ・カウンシルをはじめとする海外機関の大きな協力があり、前年度と主催者分担金は変わりませんでした。ただ、充実したプログラムになったと思います。ただ、今年度からは、主催者の体制も変わり、予算的に厳しくすることが予想されます。

Q5. 今回のセミナー、シンポジウムなどからアート状況が見えてきました。重要なものだと感じました。パフォーマンス・アーツの新たな可能性、イギリスの舞台芸術などはどんなものでしょうか?

「都市に浸透する『劇場』空間ーイギリスの舞台芸術から」については、既存の舞台芸術の形式にとらわれないパフォーマンスが盛んなイギリスのアーティストをスピーカーに招いて開催しました。イギリスは、例えばサイトスペシフィック・ワークなどもエジンバラ演劇祭ではじめて紹介されたと言われるように、パフォーマンス・アーツを「劇場の外」にもちだすようなものが数多く生まれています。またアーツ・カウンシルの活動が活発ですが、今回招聘したイギリスのアーティストも助成金で活動しているわけではないそうです。経済不況などの要因もあり、「劇場の外」へ出ることは、そういった状況を受けて必然的に起こってきた流れと言えるかもしれません。一方、日本では事業仕分けがあり、舞台芸術の環境が大きく変わろうとしているなか、パフォーマンス・アーツにながでいるのか、新たな可能性を探るきっかけになればと思ってこのセミナーを企画しました。

Q6. わが国のコンテンポラリー・ダンスの状況は育成において、経済的にも環境的にもまだまだ未熟だと思えます。次世代のダンスが出てくるか心配です。またプロデューサーが少ないというもひとつの問題だと思いますが、あなたから見てわが国のダンスシーンはどのように感じられますか?

ダンス専門家差置いて日本のダンスシーンを語るほど知らないと思いますが、「コンテンポラリー・ダンス」というカタカナ表記が定着し、語彙を恐れずに言えば「作品



をつくる側の自由度が高い」という印象で流通していると思います。集客が難しくなっていますし、同世代のプロデューサーからも作り手が減ってきていると聞きます。プロデューサーが少ないというのはダンスに限らず言えることですが、TPAMでは、作品を観客に提供する制作者やプロデューサーに「プレゼンター」の育成をミッションとしています。同時に、前回のTPAMでは、制作者をもたない振付家やダンサーたちを紹介するシェア・ブースをつくらせ、インイベンタに活動するアーティストの支援にも力を入れています。

Q7. 今年は、会場が池袋の東京芸術劇場に移動し、会場が大きくなりました。コンパイルにまともな会場が少く、使用する側としては便利になりました。次の予定、課題、方向性は?

私自身は日本にいなかったのですが、東京芸術劇場の近況は増やしているため、メイン会場と周辺の劇場の距離が近く、移動しやすい場所を探っていた中で、より充実した時間が過ごせる場所として、神奈川へ移ることを決定しました。次の開催は2月14日から20日のうち数日を予定しており、IETMミーティングも再度招聘しつつ、横濱に新しくできる神奈川芸術劇場をメイン会場に、その周辺の劇場とも協力して実施したいと、現在準備を進めています。

プログラムの方向性としては、ある一つのディレクションによって選ぶのではなく、複数のディレクター、あるいは劇場による多様な価値観が、同時に出るような作品紹介の場をとらねばいけません。例えば2009年について再評価される作品があるとしたら、原理的に芸術の価値を一元的に測ることはできないのに、成功、失敗で測られてしまう側面があります。創造者であると同時に、ある種、企業人的な能力を求められるジャンルだからこそ、プレゼンター同士の負い出合いがあるような工夫をもっとしていかなければならないと思っています。

クロスアップ時代の検証
東京芸術見本市
インタビュー: ナス康 写真提供: TPAM
21世紀に入り、前世紀とは違った芸術文化の社会・環境がうまれています。特に新しいアジアの動きが活発に目に見えてきています。15年前に誕生した芸術見本市を通じてどのように日本の舞台芸術が進んできたか? 検証を兼ねて事務局長丸岡ひろみに直撃インタビューを試みました。

ありました。1995年に、当時の東京国際舞台芸術フェスティバルの事務局をPARCが引き受け、中根がディレクターを務める際、見本市を同時開催しようということになり、国際交流基金と設立されたばかりの財団法人地域創造にご相談し、第1回の見本市が実施されました。当時は、もちろんインターネットもなく、情報量も乏しく、関係者同士が情報交換できるマーケットの存在が期待されていたのだと思います。

Q2. 15年を経て当初からの変化はありますか?
時代のなかで自身が変わったのではないのでしょうか?

15年の間に、TPAMを支える構造、やり方など、さまざまに変わってきています。まず立ち上がりの2年間は、今より予算もあり、「見本市とはなにか?」という、見本市自体のカタチを整えることに専心した時期だったと思います。続く5年間で見本市の定着を図る時期、インフラを整えるための期間で、見本市が広く認知されることを目指した期間です。この間の2003年には文化庁の参画によって「インター

を例にとると、韓国には元々舞台芸術教育があり、ダンス人口も多く、また国際的なフェスティバルもあり、舞台芸術を支えるポテンシャルがありました。2005年にPAMSが始まって以降、運営母体であるKAMSの主導の元、若手のアーティストを育てる仕組みをつくってきたと思いますが、教育、資金、システムの面にも思われ、この5年間に韓国のダンスは飛躍的に成長したと聞いています。ただ、そのことが観客を牽引する要素になっているかどうかはわかりません。東京は、アジア・オセアニア地域で最初に舞台芸術のマーケットを立ち上げ、その後、オーストラリア、シンガポール、上海、ソウルと続きます。東京以外のマーケットは国家主導で実施され、資金的にも相対的に潤沢です。シンガポールは今までのものを刷新した見本市を立ち上げました。いずれにせよ東アジア、東南アジアを広くカバーしていますが、その他の国はあくまでも自国のものを紹介するというスタンスです。日本のものだけでなく海外のものも扱うTPAMとは相互補完的に行っていると思います。それまでアジアには



stage  
**TOKYO  
 PERFORMING  
 ARTS MARKET**

The 14th annual arts smorgasbord brings a slew of novel acts to town

By DAN GRUNEBAUM

At heart, the Tokyo Performing Arts Market is what its name suggests: an industry convention that gives performers and artists a chance to meet, mingle and, hopefully, sign contracts with venues and promoters.

But for layfolk, TPAM offers a bounty of performances in the form of its TPAM Showcase and International Showcase. The former is open to just about anyone, while the latter is a focused series featuring domestic companies selected by local experts as well as foreign groups recommended by overseas partners. Taken together, the showcases offer such a surfeit of intriguing dance, theater, music and all manner of performance that the only problem is deciding where to begin.

If one has to pick a starting point though, the Dewandaru Dance Company's *Hallucination* is an appealing choice. A solo piece featuring dancer Rianto, it's inspired by Shoko Tendo's book *Yakuza Moon*, in which the author recounts her upbringing as the daughter of a Japanese gangster.

Also of interest will be Kakuya Ohashi's re-envisioning of Stravinsky's masterpiece *The Rite of Spring*. After bringing meta-dance to Tokyo with his *Clarity* trilogy, Ohashi now transposes the first decade of the 21st century, which was marked by a wave of globalization, onto the early 20th century, a time when the world was rushing into WWI.

On the theater front, noted young playwright Shu Matsui follows up last year's examination of discrimination, *That Man's World*, with *Hakobune (Ark)*. The piece is inspired by the recent revival of

interest in the Marxist polemic *Kanikosen* ("The Crab Cannery Ship"), a 1929 novel about the exploitation of blue-collar workers that is back on bestseller lists in the wake of the economic crisis.

The International Showcase includes worthy Japanese performers like veteran director Norimizu Ameya, whose work tackles such themes as blood transfusions, artificial insemination and infectious disease. But it is perhaps the overseas visitors who will be of most interest to audiences, given that all of them are making their Japan debut.

From Quebec comes the Cas Public company, whose mission is to bring contemporary dance to young audiences. Founded by Helene Blackburn in 1989, the troupe scored a big success with a reworking of the Bluebeard fairy tale at the Paris Opera in 2006, which was widely acclaimed for its appeal to both children and adults.

Sumatra's Nan Jombang Dance Company was established in 1983 by the choreographer Ery Mefri. The troupe, which includes members of Mefri's family, builds a minimalist contemporary dance form from the vocabulary of Indonesian traditional dance, and has performed at important venues such as the American Dance Festival.

From the UK, Duncan Speakman brings his Subtle Mob series to the streets of Ikebukuro. The free shows will "explore new relationships with society and the audience through such schemes as utilization of digital technologies or active involvement of the viewers."

Producer Hiromi Maruoka says that while TPAM's bilingual performances and seminars have helped to internationalize the thinking of Japanese performers, there is still a long way to go.

"In terms of contents and expression, I feel that it has been difficult for artists to form ideas because of the lack of ideas in Japanese society," she states. "The flood of performing arts without ideas is unhealthy, but in a sense, the fact that it reflects the social situation can be said to be healthy."

She adds that there is an upside to the small audiences for the domestic scene. "In terms of the economy, the fact that Japanese contemporary performing arts can raise only a few professionals is unhealthy, but... it can also be said that the severe situation has been stimulating the emergence of original and unique forms of art."

**TPAM Showcase: various venues, Feb 27-Mar 5. TPAM International Showcase: Tokyo Metropolitan Art Space, March 1-4. See stage listings for details. For more information, see [www.tpam.or.jp](http://www.tpam.or.jp).**

## Dua Tari Karya Ery Mefri Dipentaskan di Jepang

Laporan wartawan KOMPAS Yurnaldi  
Minggu, 28 Februari 2010 | 08:45 WIB



KOMPAS/AGUS SUSANTO

Grup tari Nan Jombang saat memersembahkan tari Sarikaik Pangka Sangketo dan Ratok Piriang karya koreografer Ery Mefri di Bentara Budaya Jakarta. Kamis (23/8/2007).

**JAKARTA, KOMPAS.com** — Dua tari karya koreografer terkemuka Indonesia, Ery Mefri, dari Nan Jombang Dance Company, dipentaskan di Tokyo Performing Arts Market 2010 dan International Showcase di Tokyo Metropolitan Art Space, 1-4 Maret di Tokyo, Jepang.

Menjelang keberangkatan ke Tokyo di Bandara Internasional Soekarno-Hatta, Ery Mefri mengatakan bahwa sejumlah negara di Tokyo Performing Arts Market 2010 (TPAM 2010) akan menampilkan tari karya koreografer terpilih. "Kebetulan, dari Indonesia yang dipercaya Nan Jombang Dance Company," ujarnya, Minggu (28/2/2010) di Cengkareng, Banten.

Dua tari yang akan dipentaskan koreografer Ery Mefri adalah "Rantau Berbisik (Warung Nasi Padang)" dan "Syarikaik". Rantau Berbisik berkisah tentang tradisi merantau orang Minang. Bila tidak merantau, maka ada bagian-bagian dari hukum matriakat sedikit-banyaknya terlanggar dalam upaya pencarian nafkah dan kehidupan anak-istri. Bila ini sampai terjadi, maka hal itu merupakan sesuatu yang memalukan.

"Dalam karya 'Rantau Berbisik', saya fokus pada langkah awal sebagian para perantau mengawali kehidupannya di perantauan dengan membuka warung nasi Padang secara kecil-kecilan. Namun, ini adalah awal kerja keras untuk menjadi usaha besar kelak kemudian hari," papar Ery Mefri, yang sudah 27 tahun malang melintang dan menciptakan puluhan tari Minang Kontemporer.

Adapun pada karya "Syarikaik", Ery yang sebelumnya pentas di Singapura, Desember 2009, mengkritik kondisi kekinian di Indonesia. Syarikaik atau serikat di Minangkabau merupakan kelompok komunitas. Syarikaik dulunya adalah tempat menyelesaikan masalah masyarakat secara musyawarah dan mufakat, serta menghidupkan silaturahmi.

"Perubahan zaman terjadi sehingga peran dan fungsi serikat kini tidak seperti dulu lagi. Sekarang sudah ada intervensi baik oleh pemerintah maupun kepentingan lain sehingga keberadaan serikat menjadi bibit sengketa. Kebersamaan mulai luntur sehingga yang dominan adalah semakin menguatnya individualitas," papar Ery.

Serius di jalur tari Minang Kontemporer, Ery Mefri hingga 2011 sudah mengantongi undangan untuk tampil di festival tari dunia di Essen Mulheim, Berlin, Australia, dan London. Bahkan, dia juga berpeluang tampil di Amerika Serikat, menyusul penampilan khusus Nan Jombang Dance Company yang diprakarsai Yayasan Kelola Jakarta di Taman Ismail Marzuki, 14 Februari 2010, di hadapan belasan presenter dan direktur festival di 10 negara bagian di Amerika Serikat.



## Wisdom of the crowd: interactive theatre is where it's at

The British Council's Tokyo showcase proves that interactive, participative work is the real future for British theatre



Hats off ... A Small Town Anywhere, an audience-participation piece by Coney.  
Photograph: Gavin Millar

Five years ago I wrote a piece for the Guardian arts pages about [one-to-one performance](#). At the time these interactive performances in which it was just you and an artist – or, in one memorable case, just me, the artist and a very large, very dead pig – seemed as if they were merely an interesting sidestreet off the main theatrical highway. Not any longer. This week the British Council is hosting a raft of British artists and companies – including Tim Crouch, Melanie Wilson, [Coney](#), [Blast Theory](#), Stoke Newington International Airport with their [Live Art Speed Dating](#) and Duncan Speakman, amongst others – in a showcase of interactive performance at the Tokyo Performing Arts Market.

After years of politely ignoring them, British theatre has woken up to the audience, and the role they play in any piece of work. As [Connected](#) on-line curator, Andy Field, writes on the website and forum (which is well worth checking out) interactive performance "is not a genre. This is not a niche."

Clearly not. New writing theatres such as The Royal Court and Soho are taking these developments very seriously, and the National Theatre, the National Theatre of Wales and festivals such as Brighton, Norfolk and Norwich and [LIFT](#) are beginning to understand the theatrical potential of collaborative creativity. It feels as if a real shift in the culture is taking place. The Connected showcase with its on-line discussions is a manifestation of this, but so too are projects such as [Theatre Sandbox](#), which aim to help support and create theatre pieces using pervasive media technologies, which by their very nature often reframe the relationship between artist and audience.

Of course not all interactive theatre uses high technology. Adrian Howells's [breathhtakingly intimate](#) Footwashing for the Sole takes the form of a simple ritualised encounter that merely utilises soap and water. Coney's brilliant [Small Town Anywhere](#), a piece with no performers but merely a playing audience, is almost as low tech as you can get. But interesting possibilities do occur when the two combine. I recently had a conversation with one of the people involved in the Hide and Seek/Punchdrunk collaboration on the prototype of a piece called [The Last Will](#), a hybrid of theatre and gaming, who commented that those like myself who came from a theatrical background arrived in the space and waited for something to happen, while the gamers immediately started pulling the set apart looking for clues (in one instance so thoroughly that he had to be stopped).

What this suggests is that audience behaviour – in particular, the traditional theatre behaviour of sitting politely in rows and not speaking – is a learned behaviour and one that can be quickly unlearned. We already see signs of that. Put people in a traditional theatre auditorium, and – with the exception of a few mobile phones going off – people behave traditionally. But let them loose in other spaces, and they now increasingly expect to get the opportunity to play, genuinely interact, curate their own experience of the work and feel that their presence really does make a difference – that being there matters. And if it really does matter, it changes the contract between artists and audiences. That's challenging, but also offers the potential for everyone to create, act and experiment together.

<東京芸術見本市 2010>

事務局長  
副事務局長  
プログラム担当  
プログラム・アシスタント  
広報  
経理

丸岡ひろみ  
田村光男  
久保田夏実、佐藤道元、天野未来  
櫻村千佳、久保田広美、門田美和、山浦日紗子  
中島香菜  
桜井由美子

テクニカル統括・会場デザイン設営  
テクニカルディレクター  
照明  
音響  
受付統括  
スタッフ

関口裕二 (balance,inc.DESIGN)  
川口真人 (レイヨンヴェール)  
菅橋友紀 (balance,inc.LIGHTING)  
金子伸也  
柿崎桃子  
平中早智子

クリエイティブ&アート・ディレクション  
デザイン  
DTP  
システム構築  
Web スタッフ  
通訳  
翻訳  
記録写真  
記録映像  
旅行アレンジメント  
印刷

栗林和夫 (クリとグラフィック)  
クリとグラフィック  
吉福敦子 (StudioGOO)、大沼恵子  
有瀧敬之、松山峰久 (エフ・ディ・エス)  
二見博美  
イディオリンク株式会社  
新井知行、近藤聡子  
堀之内毅  
古屋和臣、仁田美帆、油谷崇平  
近畿日本ツーリスト株式会社  
有限会社 海月舎



東京芸術見本市 2010 開催報告書

編集・発行：東京芸術見本市事務局  
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 3-1-2 サウスビル 3F  
NPO 法人国際舞台芸術交流センター内  
Tel: 03-5724-4660 / Fax: 03-5724-4661  
tpam@tpam.or.jp / www.tpam.or.jp

印刷：株式会社 トービ  
発行日：2010年8月15日